

第10回

子どもノンフィクション文学賞



キミたちの体験が
キミたちを育てる



第10回 子どもノンフィクション文学賞

受賞作品集

第10回 子どもノンフィクション文学賞

受賞作品集

(平成30年度)

主催・北九州市 共催・北九州市教育委員会 協賛・日本児童図書出版協会
後援・朝日学生新聞社 公益社団法人 全国学校図書館協議会 公益社団法人 海外子女教育振興財団

(平成30年度)



子どもノンフィクション文学賞

ウェブ検索

もくじ

ごあいさつ	◆	北九州市長 北橋健治		2
選考講評	◆	那須正幹／最相葉月／リリー・フランキー		4

◆小学生の部◆

👑大賞

佳作

観天望気で命を救え！	◆	座間 耀永		10
だれかを好きになるということ	◆	新池谷 悠		20
ぼくとほちょうき	◆	下館 優希		30

選考委員特別賞

【那須正幹賞】	◆	鹿野の自然を未来につなぐジュニアドクターとしての任務	田村 綾梨		32
【最相葉月賞】	◆	がんばりマン	名護 翔哉		42
【リリー・フランキー賞】	◆	ヘアドネーション、夏	白井 こはる		45

第10回子どもノンフィクション文学賞

受賞作品集

二〇一九年三月二十三日 発行

編集・発行 北九州市立文学館

〒八〇三―〇八二三

北九州市小倉北区城内四―一

電話 〇九三―五七一一―五〇五

FAX 〇九三―五七一一―五二五

印刷・製本 株式会社ゼンリンプリンテックス

登録番号 北九州市印刷物登録番号第1809172A号

※本書掲載の記事及び写真の無断転載・複製を禁じます。

◆中学生の部◆

👑大賞

佳作

◇ 日常が崩れた日 非日常が日常になった日
金本 菜々実……………50

◇ 100キロメートルを往くサイクリング・デイ
(ペンネーム) 山沢 智知……………60

◇ 「難民」の同級生と先生と一緒に
学校に通っていた僕が考える「難民」問題
ドーソン デイーン博真……………72

選考委員特別賞

◇ 【那須正幹賞】 晴れ 時々 かえる
くえりとぴよんきちの物語く 井崎 英里……………78

◇ 【最相葉月賞】 ぴんぴんころり 竹本 愛梨……………91

◇ 【リリー・フランクナー賞】 平和ということ 松尾 安純……………95

資料 ◇ 小学生の部 受賞作品・学校団体賞・最終候補作品……………102

資料 ◇ 中学生の部 受賞作品・学校団体賞・最終候補作品……………103

資料 ◇ 応募結果……………104

第10回子どもノンフィクション文学賞



北九州市長 北橋 健治

第10回子どもノンフィクション文学賞の受賞者の皆様、そしてご家族、学校関係者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

当文学賞は、子どもたちがノンフィクションを書くことを通して、自ら考える力を磨くとともに、人間や社会への関心を高め、先人たちが築いてきた豊かな文芸の土壌を継承し、成長していくことを願い、平成21年度に創設し、10回目を迎えました。

今回は、国内外から、小学生の部232編、中学生の部512編の合計744編の作品が寄せられました。

今回応募された作品の中から、厳正な選考を経て、小学生の部は座間耀永ざまあきのさんの『観天望氣で命を救え！』、中学生の部は金本菜々実かねもじなみさんの『日常が崩れた日 非日常が日常になった日』が大賞に決定いたしました。また、10名の方の作品が佳作、選考委

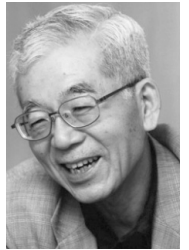
員特別賞に選ばれました。

さらに、この文学賞に特に熱心に取り組んでいただいた小・中学校に贈られる学校団体賞は、LCA国際小学校、大阪教育大学附属天王寺小学校、北九州市立志徳中学校、広島学院中学校、広島市立瀬野川東中学校、福岡教育大学附属福岡中学校に決定しました。先生方のご指導ご協力に感謝申し上げます。

さて、本市は、2020年の「東アジア文化都市」の開催都市に選定されました。これは、日中韓3か国において、文化芸術による発展を目指す都市をそれぞれ一都市選定し、相互に交流を図りながら、一年を通じて様々な文化芸術イベントを実施するものです。

これを契機に、文化芸術の力を活用した「創造都市・北九州」として、さらなる文化芸術の振興に取り組むとともに、豊かな感性を持つ子どもたちの育成へとつなげてまいります。

結びに、選考にあたりご尽力を賜りました選考委員の皆様、多忙中、応募をとりまとめていただいた学校関係者の皆様をはじめ、当文学賞のご支援をいただいた関係の皆様に厚くお礼を申し上げます。



様々な素材を生かした力作たち

那須 正幹

このコンクールも今回で第十回を迎え、作品の質も年々向上しているように思える。最終選考に残った作品は、小中共に力作が多く、選ぶのに苦労させられた。

小学生の部で最優秀に輝いた『観天望気で命を救え！』は、空を観察することで天候を予測する、あるいは天気俚語と呼ばれる、天候に関することわざや土地の言い伝えを元に天候を予測することだが、作者はそれらを一つずつ実際に体験し、根拠のあるものかどうか検証して行く。テーマも個性的だし、何より、自分自身の目で確かめていく姿勢がよかった。文章も巧みで、読ませる技術を習得していた。

佳作の『ぼくとほちょうき』は、生まれながら耳に障害を持つ作者が、手術後補聴器をつけて通学するようになり、さまざまな体験をする。一年生らしい素直な文章に好感がもてた。『だれかを好きになるということ』は、昨年度の佳作作品の続編というところで、飼い主に一向に慣れようとしないうさぎとの奮闘をえがいている。昨年の作品では、なんとかしてうさぎを抱っこしたい作者の思いが強かったが、今回は、そうしたうさぎの性格を認め、それなりに愛情をもって付き合いたった作者の心の成長がうまく表現された佳作だった。

「那須正幹賞」の『鹿野の自然を未来につなぐ』は、鳥取大学のジュニアドクターの試験に合格した作者が、環境問題について学習し、中海の水質改善のための湖底耕耘作業に参加する。大学生なみの高度な研究作業に参加した作者に拍手したい。

いつもは小学生の部より低調な中学生作品だが、今回は個性的な作品が多かった。

最優秀作品『日常が崩れた日、非日常が日常になった日』は、昨年七月に起きた広島市内の豪雨災害に遭遇した作者の体験をリアルに記録した作品で、我が家の廻りで刻々と起こっていく増水、避難するかどうかの迷い、あるいは災害後の不便極まりない生活、近隣住民の死亡などを中学生の目で、しっかりととらえていて、災害記録としても貴重な作品だった。

佳作となった『難民』の同級生と先生と一緒に学校に通っていた僕が考える「難民問題」は、タイトル通り小学五年のとき、アトランタのインターナショナル・コミュニティ・スクールに一年間在学し、アメリカに移住してきた様々な子どもや先生との交流の中で、彼らがいかに真面目に学習し、その両親たちも勤勉に働いているかを知り、日本での難民対策について言及している。実体験をもとにしただけに説得力があった。

同じく『100キロメートルを往くサイクリング・デイ』は、同級生たちと埼玉県新座市の自宅を出て、羽田、浅草、スカイツリーを見物し、我が家に戻るまでのサイクリングを淡々と描いている、子どもだけで、この距離を走破したことに、まず感動。リーダーらしき人物もいないし、アバウトな行動計画で、最後には帰宅できるかどうか、かなり不安を抱きながらなんとかたどり着くわけだが、交通量の多い大都会の中で、こうした冒険を決行した作者の勇気をほめたい。

「那須正幹賞」の『晴れ時々かえる』は、作者が幼稚園の頃、新築の家に引っ越すと、庭にヒキガエルが現れるようになり、友だちになる。以来七年間、周辺の環境変化を織り交ぜながら、ヒキガエルとの交流を描いた作品。いわゆる動物飼育や観察とは一味違い、たまにしか庭に現れないヒキガエルを七年間も記録しているところが面白い。ちなみにヒキガエルは長生きだそうだから、庭に現れる力エルも同一なのだろう。

児童文学作家・日本児童文学者協会評議員

1942年生まれ。児童文学作家。主な作品に、1978年発表の『それいけズッコケ三人組』をはじめとする『ズッコケ三人組』シリーズ（巖谷小波賞）があり、2004年末の完結まで、50巻に達した。2005年からは、『ズッコケ中年三人組』シリーズを年一作のペースで刊行、2015年末に最終巻として『ズッコケ熟年三人組』を刊行し、シリーズを完結した。ほかにも『ねんどの神さま』『さぎ師たちの空』（路傍の石文学賞）、『絵で読む広島島の原爆』など多数。

書きたいことを書いているか

最相 葉月



最終候補は読みごたえのある作品ばかりで、とくに小学生はこれまで以上にテーマが多岐にわたり、オリジナリティあふれる内容で教えられることがたくさんありました。中学生は介護や災害、難民といった時代を映し出すテーマがある一方、自分語りに終始して読者を置き去りにするものが複数見受けられたことが気になりました。個人応募におもしろい作品が多いのは、書きたいことを書くという原点に立っているからでしょう。応募前に今一度、なぜ書くのか問い直してみてください。

小学生の大賞『観天望気で命を救え！』は空を見て天気を読みとることができれば命を救えるという確信のもと、言い伝えや仮説を実体験を交えて検証した読み応えのある作品です。ヨットに乗るだけあつて自然の変化に敏感で周囲をよく観察しています。立証とまでいかないう部分については、今後もデータを集めて精度を上げてほしいと思います。

佳作『ぼくとほちょうき』は生まれつき耳が聞こえにくい作者が手術を受けたことを淡々と素直に綴っています。怖くて逃げたことや泣いたこと、さみしかったことが、まっすぐに伝わってきて胸に染みみました。

佳作『だれかを好きになるということ』はうさぎの飼育記の形式を借りて「好きになる」感情とは何か、心とは何かについてとことん考えています。動物との交わりを通して作者の心は大きく成長したと思います。

最相賞の『がんばりマン』は586グラムの超低体重出生児として生まれた作者が、闘病の様子を両親に話を聞きながら書いた作品です。気管切開しているためブルに入れないことや、声が出ないので泣いても涙をぼろぼろ流すだけでお母さんも一緒に泣いたこと、痰が原因で友だちに「くさい」といわれたこと、「たか先生」が「チクチクことばとふわふわことば」について話してくれたこと。どのエピソードからも実際の場面が想像できて、いつしか作者を応援していました。

中学生の大賞『日常が崩れた日 非日常が日常になった日』は、平成30年7月に西日本を襲った豪雨災害の体験記です。はじめの頃の根拠なき「うちは大丈夫」という思い込み、草の根っこのようななおいで土砂崩れの危険を察知して避難を決める時の逼迫した状況、友人一家の死とそれをめぐるマスコミとのやりとりなど、現場にいた当事者でなければわからない事実と心の動きが丁寧に描かれていて大変重要な記録になりました。

佳作『100キロメートルを往くサイクリング・デイ』は埼玉在住の男子4人が自転車で羽田空港まで行って家に帰るまでの道のりを綴っています。空港に着く直前の胸躍る感じやレインボーブリッジを自転車を押して歩くときの息づかい、買い物時間がオーバーしてイライラする様子など、押しつけがましくなく記述していることに好感を持ちました。4人が風を切って走る様子が目に浮かび、特別な事件があったわけでもないのに、いいものを読んだという気持ちになりました。

佳作『難民』の同級生と先生と一緒に学校に通っていた僕が考える「難民」問題は、アトランタにある難民の公教育を行う学校で過ごすという希有な体験を軸に、難民問題という国際的なテーマに挑んだ作品です。日本の受け入れが進んでいないことや「難民」という言葉を再考する必要があるのではないかという指摘など大変示唆に富みます。スピーチのような文章なので、米国での思い出や現在のクラブの活動を具体的なエピソードを交えて書くことさらによくなったでしょう。

最相賞の『びんびんころり』を読み、ついに「ヤングケアラ」が登場したと思いました。超高齢化社会にあつて介護の負担は孫、ひ孫にまでしかかるようになってきました。曾祖母と祖母の関係性や、皮膚片を掃除してまわる母親のストレスフルな時間がよく描かれています。作者はこの状況をポジティブに捉えていることが未来の希望とと思いました。

ノンフィクションライター

1963年生まれ。1997年『絶対音感』で小学館ノンフィクション大賞、2007年『星新一 ―〇〇―話をつくった人』で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞など五つの賞を受賞。他の著作に『青いババ』、『ビヨンド・エジソン』、『セラピスト』、『れるられる』、『ナグネ 中国朝鮮族の友と日本』、『理系という生き方』、『胎児のはなし』(共著)、当賞受賞者への取材を含む『調べてみよう、書いてみよう』(講談社)など。主なテーマは科学技術と人間の関係性、精神医学、教育、音楽ほか。

大切なのは調べていく過程と 書き手の思いの行きどころ

リリー・フランキー



©HIROSHI NOMURA

小学生の部の大賞の『観天望気で命を救え!』は、空を見て天候を予測できるということを経験から調べていますが、いろいろなものを見る機会に恵まれ、かつ自由な発想ができるところにみずみずしさを感じました。自由にものを考える練習がなされてきたのかなとも思いますが、そういう伸び伸びとした教育はこれからは大事なことでううと感じました。佳作の『だれかを好きになるということ』は、すごくよく書けていると思ったのですが、どこか既読感がありました。昨年も佳作を受賞した作品の続編だったのですね。今回はさらに進んだ展開がありました。この作者は、以前もカイコを観察した作品を書いていて、印象深かったことを覚えています。

もう一つの佳作『ぼくとほちゅうき』は、文章はただとしいながら、さみしくて泣いたとか逃げたとか本当に痛いとか書いています。でもそんな自分の気持ちや様子を淡々と、まるで正岡子規のように写生していて、それによってこの作者の実感や生活がとてよく伝わってきます。『がんばりマン』もそうですが、自分と、自分に障害があることとの向き合い方が冷静で、自分よりも自分の障害に伴う周囲の人間をきちんと観察できていることが作品をよりよくしています。

リリー・フランキー賞は、『ヘアドネーション、夏』です。小学2年生の筆力とは思えないおもしろさがあり、とてもよくできています。髪の毛が伸びない子どもに髪の毛を寄付したいというところから、初めて髪を切って寄付するところまで、なかなか読ませる力があります。まだ小学2年生なのにこれだけ書けるのですから、将来も書いていって欲しいと思います。

中学生の部の大賞は、『日常が崩れた日 非日常が日常になった日』です。今までも東北大地震や熊本地震のことを書いたものがありましたが、この作品は災害にあった家の周囲の人間のことや、取材などで外から入って来る人間の様子など、災害後の生活がしっかりと

書けています。また、「草の臭い」のくだりからのところは、映画では一番表現できない部分で、文章でなければ伝わらない生々しさなど、拔群の文章力です。

佳作の『100キロメートルを往くサイクリング・デイ』は、自分たちにとっては大冒険なのだと思いますが、自転車に乗った臨場感やドキドキ感が、脚色の必要はないのですがもうちょっと伝わってくると良いと思います。いろいろな話を動かさずに、時系列をそのまま書いて筆力があり、特に家に帰ってきてからの部分は文学性があると感じました。

佳作の『難民』の同級生と先生と一緒に学校に通っていた僕が考える「難民」問題は、現体験もあり、いろいろな難民について本で調べたり、イベントに参加して話を聞きに行ったりしています。自分の興味のあることに対して、書物で調べ、足を動かしているところが評価できます。

リリー・フランキー賞は、『平和といつこ』です。テレビを観て書いている部分もありますが、それだけで書いた話ではありません。テレビにインスパイアされて、自分なりに問題意識を持ったことが大切で、テレビの情報を軽く見てはいません。書いている内容や文章はすごく読ませる力があると思いますし、教えてもらったことも多かったです。

この文学賞は、子どもによるノンフィクション文学で、理科の発表や評論ではないので、そこに正解を求めているわけではありません。大切なのは、調べていく過程とか、書き手の思いの行きどころとかだと思って読んでいます。一方で私の成長物語とでもいうような自分を主人公にしたような書き方や、自分の内向する思いを脚色して書かれたりすると、それは違うジャンルのものではないかと思ったりもします。上手に書くこととして手垢にまみれた表現や構成がなされると、逆にノンフィクション文学としては安っぽくなります。言葉で現実を意識的に盛り上げていくような書き方はこの文学賞にはふさわしくないと考えています。

(談)

イラストレーター・作家・俳優など

1963年、北九州市小倉生まれ。武蔵野美術大学卒業。イラストやデザインのほか、文筆、写真、作詞・作曲、俳優など、多種多様な分野で活動する。自身初の長編小説『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』は06年本屋大賞を受賞、220万部を超すベストセラーとなった。オリジナル絵本『おでんくん』はアニメ化され、オリジナルグッズも性別世代を超え幅広い人気を集めている。主演映画『万引き家族』は、カンヌ国際映画祭最高賞パルム・ドールを受賞。

大賞

観天望気で命を救え！

青山学院初等部 六年

座間 耀永

「死ぬー！」

「怖い！」

二〇一八年八月七日夜九時。ゲリラ豪雨の中、私は車の中でふるえた。「せっかく去年の夏から観天望気を研究して、こうなると予測していたのに失敗した。」頭がぐるぐるした。なんとか助かったあと、私は確信した。「観天望気を使いこなせば人命は救える。」

そして人命を救ったもう一つの事実。今なお鎮火をしていない、史上最悪のカリフォルニアの大火災で、一命をとりとめた叔母からも十一月十四日連絡がきた。私は、

海外でも、「観天望気」が役立つか、ロサンゼルスに住む叔母にも協力を仰いでいた。以来、叔母も天気に関心になり、山火事後の風向きを見て早めに避難したそうだ。写真を見たが叔母の家の数百メートルまで黒煙が立ち込めていた。

これは、私が一年間かけて「観天望気」で人命は救える！を実証した記録である。

さて、「観天望気」とは、広辞苑第七版によると、「空の状況を観察して、天気を予測すること。雲形、雲の動き、風、太陽や月の見え方などから経験的に予測する。」と定義されている。誰でも「西から天気が変わる」や、「夕焼けがきれいな翌日は晴れ」という言葉を、一度は耳にしたことがあるだろう。これが、ずばり観天望気だ。私は二年前からヨットを習っている。ヨットは風や潮の動きなど自然に大きな影響を受けるスポーツだ。今は天気予報をスマホで見ることができる時代だが、一度ヨットに乗ってしまったら天気予報を見ているひまなどない。一瞬にして風向きが変わったために命を落とす場合

もある。そのため、私は昨年の夏から、この「観天望気」がどれだけ当てになるのか、自分の命を助ける手段となるものなのか、徹底的に調べた。それを確かにした出来事は冒頭の二〇一八年八月七日に起こった。その日は満月だった。昼間は今年の夏らしい猛暑で夜も生暖かい気温だった。塾に向かう際、ふと空を見上げると鳥肌がたつた。月はまだこうこうと美しく輝いている。しかし、黒い雲が西の方に流れ始めていた。ずっと見ていると、やがて遠くの空にずっと青白く鈍く光る稲光が見えた。

「まずい。」

と思った。なぜなら私は一年前に似た経験をしている。二〇一七年八月十九日。その日はヨットの練習で私はマリナにいた。そのまま友達や家族とマリナに宿泊予定だった。昼間は暑くて風が無く、ヨットには最悪な日だった。夜になり、みんなで楽しく食事していた。すると、黒い雲が流れ出し水平線に稲妻が見えた。みるみるうちに稲妻の回数が増え、突然、ピカッドーンという轟音と共に目の前が見えないほどの雨が降ってきた。幸い

私は屋根のある所にいた。でも外の荷物は、取りそびれてしまった。棧橋の下の黒い海は荒れ狂い、ごうごうと流れ、船と棧橋を結ぶ太いロープもどうどうと押し流されながら船は前後左右にゆさゆさゆれた。水平線が昼間の様に光る。

「ここに雷は落ちないで。」

という恐怖と闘いながら一時間。雨はなにごともしなかったかのようにぴたと止み、静寂が訪れた。回収しそこなった荷物はぐしゃぐしゃになり、母の携帯は見事に水没した。その日、二子玉川の花火大会は中止になり、世田谷地区は大規模な停電被害に見舞われたそうだ。

私は、その日を思い出し、すぐ父に電話して、

「終わる時間より前に迎えに来て下さい。」

と頼んだ。私の計算が正しければ、終わるころにはまだごう雨がやってこない。授業に、集中できなかった。遠くで時々、ごごごとと雷音が聞こえ始めたからだ。

「やがて来る。まだ大丈夫。」

ところが、授業までが延長してしまった。置き傘を借り

て、急いで階段を下りたが、間に合わなかった。雷鳴がどろろき、ドーンと音がして雨がまるで滝のように落ちてきた。もう前は見えない。ドーン、ぴかっという音の感覚がどんどん小さくなる。朝日小学生新聞「天気の間で十四」によると「ぴかっ」と光ってから十秒だと雷までの距離は約三十キロメートル」と書いてあったことを思い出す。光ってから数を数えると二十秒くらいだった。近くに落ちる可能性がある、と恐怖に震えていると、父が傘を差さずヨットパーカーをかぶって走ってきてくれた。差せる状態ではなかったのだ。あわてて車に走る。雨が身体をたたきまくる。さささささ。ほんの数秒なのに自分も車の中もびしょぬれだった。フロントガラスに当たる雨が強すぎてまったく前が見えない。事故を起こしたくない、と父が、まるで亀のようにゆっくりと走る。周囲の車も全く同じだった。呑川という大田区の中央を大きく流れる河の脇に差し掛かった時だ。目を疑った。その河が増水して横の、マンホールが開いてしまったのか、橋の右わきから噴水のようにどどどどどと水

が流れている。それがこちらの道にせまってくるのだ。「川だ、川ができている。」

私達は目を丸くした。その川はごうごうと流れていた。後ろを見ると車が続いている。後戻りは出来ないのこの状況はどうやって後ろには伝えられない。父は迷ったが、このまま行くと車を進めた。ざあ。まるで、ジュラシックパークザライドの最後の時のような強烈なしぶきが、フロントガラスを覆った。縁石をふんで、後部座席がぐぐーっと持ち上がった。壮絶な恐怖。

「溺れる！」

しかし、奇跡的に車は幹線道路に出て無事に帰宅した。私は震えがおさまらなかった。

ニュースでは多くの電車が停止大規模な停電発生と言っている。私は雲の動きをみていたにも関わらず、塾を優先してしまった自分を後悔。塾の友達とは交通手段がなくなり夜まで帰宅できなかったと聞き、知っている知識は実践しなければ命に係わると実感した。

私の「観天望気」の立証について説明したい。二〇一

七年夏休み以降、私は毎朝、東、南、西の雲の動きをほぼ一日も欠かさず記録を取っている。特に昨年の夏休み中は、「観天望気」と結びつくものは写真に撮り、時間経過と共に記録を残している。

まず、命がけで立証した「西から天気が変わる編」二〇一七年八月八日。私は母と大阪へ日帰りの用事があった。大型の台風5号が迫っていた。キャンセルも考えたが、飛行機が飛ぶのであれば、「西から天気が変わる」の確認ができるとわかり、大阪へ向かうことになった。朝五時。東京の空はどんよりしていた。七時。東京の空に厚い雲がかかってきた。この時、台風は和歌山県付近に迫っていた。そして上空。「雲の上は晴れている」を確認しながら、西へ向かう。下降が始まると、激しく機体がゆれた。ふわっとあがりたりさがったり。怖くて母と目が合った。大阪は激しい雨が突然降ったりやんだりした。しかし午後には青空が広がってきた。さらに夕焼けも見えてきた。さて雨は東京へ移動しているのか？再び、東京に戻る。また機体がふうつと上へ下へ動き、心臓が

バクバク鳴った。予想通り、東京は雨が降っていた。「観天望気」はやはり当たっていた。

次に、動物編。「つばめが低く飛ぶと雨になる」を観察した。二〇一七年七月。マリナに今年もつばめが巣を作った。私はマリナに行くたびに巣の様子を観察した。つばめはいつも比較的巣より高く飛んできて、ひなにえさを与えていた。ところが七月二一日、晴天だったが、つばめが海面すれすれを飛んでいるのをカメラに収めることができた。待っていると見事に夕立ちが降った。翌日の朝もつばめが低く飛んでいた。つばめは飛ぶのが早く、連写しても証拠写真を撮るのが大変だった。その後、やはり雨が降った。今年の夏もつばめは同じ場所に巣を作った。今年は、晴れが多かったので、決め手になる観察はできなかったが、つばめが低く飛んでいる日は曇り空が多かったのは事実だ。同様に、「どんびが高く飛ぶと晴れ」も立証できた。二〇一七年八月六日、この日はどんびが高く飛んでいた。マリナは終日快晴だった。八月十九日も曇り空だった。昼頃から晴れてきて空

を見上げるととんびが大きく輪を描いていた。しかし、さきほど記した通り、二時過ぎから入道雲がもくもくでくると、とんびはいなくなり、やがて夜は大雨となる。翌朝は曇っていた。しかし、とんびが曇り空を飛び始めたあと、午後からは快晴になった。これらの経緯もカメラにおさめている。難しいのは猫。「猫が顔を洗うと雨」は五分五分だ。祖母宅の猫がよく遊びにくるのでその時にじっくり観察。二〇一七年七月十六日と十七日時々、顔を洗っていた。しかし、両日とも晴れ。ところが十八日は降った。十九日もよく顔を洗っていたが、十九、二十日とも晴れた。猫の観天望気は当てにならないと決めた。しかし、今年の十一月十三日、晴れているのにしきりと顔を洗う。写真を何枚とつても気にしない様子だった。すると天気予報には出ていなかったのに急に雨が降ったのだ。つまり、激しく洗っている時は本当に雨が降るのだと確信した。「アマガエルが鳴くと雨」これも難しい。何故なら私は去年まで過去七年間毎年、田植えに行っていて、耳にこだまが聞こえるほどアマガエル

の合唱を聞いて田んぼで過ごす、全く雨は降らない。田植えの季節と梅雨が重なっているのでそういう説になっただけなのではないかと推測する。さて、動物である人間の感じ方編、これは意外と全部あてになりそう。『神経痛が痛くなると明日は雨が降る』これは、となりに住んでいる祖母が、しょつちゅう、「腰が痛い。雨が降る。」と口にしてるので疑問に思っていた。そこで、中田整骨医院の中田先生にインタビューをした。すると、先生も雨の前後は身体が痛いと整体に来る患者さんが増えるそう。調べてみると、(インターネット) 天気が悪い時は気圧が低下する。その際、人間の体内でヒスタミンという物質が出る。ヒスタミンは血圧を下げ血管を拡張させるため、痛みを感じるそう。つまりこの「観天望気」は当たっている。「傷口がかゆくなると雨が降る」これは、母が帝王切開をした傷口が梅雨時にかゆい、と言っていたことと、祖母が以前大きなやけどをした箇所がかゆいと言っていたので事実だと仮定した。そこで、

「大井町皮ふ科クリニック」の高玉先生にインタビューをした。すると、傷口はふさがっていても、筋肉や皮膚には傷は残ってしまっている。その部分は血液の流れが悪くなったり、収縮が上手くいかない。この場合は、ノルアドレナリンという物質が影響を及ぼすらしいのだが、雨の場合は血行不良が起ることで皮膚に影響が出るそうだ。この「観天望気」もあっている。

「櫛が通りにくい時は雨」これは、よく雨の日に髪の毛がまとまらないと母やお友達もよく言っている。二〇一七年八月五日、私は、朝日小学生新聞のサマースクールで天然パーマの記者の方にお会いした。その日は雨で、その方と一緒に記念撮影をしようとしたら、「今日は雨だから髪がくるくるしていて恥ずかしい。」とおっしゃった。私が、

「雨と髪の毛は影響があるのですか？」と聞き返すと、天気により髪の毛が伸び縮みするため、「毛髪湿度計」というものがあると教えてくれた。調べると、朝日小学生新聞「空からのたより③」に、髪の毛

は湿度が低いと縮み、湿度が高いと伸びる性質がある。その性質を、利用した気象観測機器のひとつに、「毛髪湿度計」がある、と書いてあった。つまり、観天望気は当たっている。

ところで、「観天望気」で一番役に立ち、天気をいち早く予想し、危険を回避できるものは何か？「雲」だ。雲はどこでもだれにでも見る事ができるから、わかりやすいからだ。「入道雲がわくと夕立ちがくる」これはまさに前述した通りだ。特に二〇一七年八月二〇日はシヤッターを押し続けたため雷が水平線に落ちる写真も撮れ、生々しい記録が取れている。「雲の上はいつも晴れ」これも二〇一七年八月八日、台風五号の雨が地上で降っていたものの、激しくゆれる飛行機の中から上空が晴れているという撮影ができた。八月十七日も曇り空だったのが上空の晴天を撮影できた。「月や太陽にカサがかれば雨になる」については、二〇一七年八月四日に細かく記録撮影ができた。四日の朝の太陽にはカサがかかり、どんよりとした雨が降っていた。夜の月にもあと四日で

満月を迎える上弦の月が南中から西に移動している間、カサがかかっていた。今でも写真で見ると幻想的だが、雲から月光が白く美しかった。翌日は曇り、時々雨。五日の夜のカサはやや薄く、雲周りがもっと白くなっていた。六日は朝曇っていたが、やがて晴れになった。「夕焼けの翌日は晴れ」記録で一番気に入っているのは二〇一七年八月五日。台風五号の大雨の後夕焼けが撮影できて翌日は見事に晴れだった。「朝焼けの日は曇る」は何度も早朝の朝焼けをマリーナで見たが晴れる日も多かった。この、「観天望気」は当てにならないと思っていたが、私の見ていたのは「朝陽」であって「朝焼け」でないことが今年の冬にやっと分かった。二〇一八年十一月五日、六時過ぎにもやもやと東の空の雲にじわじわとにじむ様に朝焼けが広がった。空高くまでじわーっとオレンジ色になり、私はこれが「朝焼けか」と思った。その後、小雨がばらばらと降った。「このことだったのか」と思い、翌日の六日の朝も気を付けていると、東の層雲からじわっと朝焼けが広がってやはり小雨が降っ

た。「観天望気」でいうところの、「朝焼け」に見方が変わった瞬間だった。「うろこ雲ができる」と雨になる」は、とてもよく観察ができるが、撮影が上手くいったのは、二〇一七年七月二二日、八月九日、八月十七日。いずれも昼間は青い空だったが、うろこ雲がころころ転がるように出てきたあと、見事にわか雨が降ったのだ。「飛行機雲が出ると雨になる」「飛行機雲がすぐ消えると晴れ」は、好きな現象だ。空に真つすぐどんどん伸びていく飛行機雲を見るのが好きだからだ。二〇一七年八月八日。雲の間に飛行機雲が見えた。その後、にわか雨が降る。しかし、別の飛行機雲が出てきたときにすっと消えた後、晴れてきたのだ。ハワイに行った八月十四日。飛行機雲が二本できたがすぐ消えた。もちろん、ずっと快晴。八月三〇日、長野県に行った時は太い飛行機雲が何本も見えてはすぐ消えていった。この日はずっと空が青かった。二〇一八年十月十四日、マリーナの上を飛行機雲がすーっと伸びていき、カメラに収まりきらない長い線となった。どうなるかと思ったらやはり小雨が降って

きた。これらの「一瞬の天気の変化」は、天気予報では伝えてくれなこともわかってきた。

そして、なんと海外でも「観天望気」の立証ができた。海外に住む叔母に協力してもらい、二〇一七年八月のハワイで記録をとった。ハワイは雨が多いが快晴も多く虹もよく出くるため「観天望気、海外編」を立証するのに最適だった。「Red sky at night, sailor's delight. Red sky in morning, sailor's warning」日本でいう「夕焼けの翌日は晴れ朝焼けの日は曇る」も立証。八月一二日の朝焼けの後、午前はずっと曇っていた。翌日十三日は薄い朝焼けで小雨が降った。八月十四日は山側で小雨が降ったり止んだりしていたが夕焼けになった。夜また降ったが翌朝は晴天だった。翌日十五日は真っ赤に染まる夕焼けで十六日は見事に晴れた。「When clouds appear like rocks and towers, the earth's refreshed with frequent showers」日本の「入道雲がわくと夕立ちが来る」も立証。八月十一日、山の上にマッシュマロマンのように入道雲を撮影。その雲はさらに上空へむくむくと育

った。とたんにシャワーが降った。十二日は午後から晴れてきて、プールにいと入道雲が急激に大きくなっていった。そしてまたシャワーが来た。さらに十五日、ドライブ中に山の上まで入道雲がどんどん迫ってきてスコールが来た。どれも見事な写真を撮れて満足だ。

「If the goose honks high, fair weather. If the goose honks low foul weather. If the clouds move against in the wind, rain will follow」これは「トンビが高く飛ぶと晴れツバメが低く飛ぶと雨」に相当する。これは一日しか撮影できなかったが一四日に山の上のゴルフ場にいると、スコールの前に確かに低空を飛行していた。しかしスコールの後、高く舞い上がっていることをかろうじて撮影。その後、本当に晴れてきた。これは、短時間に観察できたので「動物観天望気はすごい」と、とても感動した。最後に、海外で一番好きな「観天望気」は「Rainbow in the morning sailor's warning. Rainbow at night sailor's delight」日本の「朝の虹は雨夕方の虹は晴れ」ハワイは本当によく虹が出る。八月十一日の

朝、海から左側半分の虹が空に伸びていくのが見えて、慌てて撮影。そのまま観察しているとシャワーが降った。十四日は早朝から山の上のゴルフ場にいたら虹が低く伸びてきてシャワーがきた。その後、上記のトンビも観察も出来た日である。立証はできなかったが調べると、海外の観天望気も日本の観天望気と同じようなものがあり、「観天望気」の知識は世界中で有効なものではないかと仮定ができる。実際世界の海を冒険している海洋冒険家の白石康次郎さんのキャンプに参加した時、白石さんも天気を見てヨットをコントロールしているとおっしゃっていた。

今、私はカメラ撮影が上手くできない時でも、雲や気象の変化に敏感だ。特に、雲を見ると、日々「あ、これから雨になる。」とわかる時が増えてきた。そのため、この後どう行動すればいいかわかってきた。「急な変化」「一瞬の変化」は自分で予測し自分で命を守る必要がある。また日々、意識していることも重要だ。二〇一八年十月二十九日の日経新聞によると、「短時間に突然、激

しい雨が降るいわゆる『ゲリラ豪雨』の発生は増加傾向にある。気象庁によると、二〇一七年までの十一年間の平均で、一時間あたり五〇ミリ以上の降水を記録した回数 は年間二三八回（アメダス一千地点あたり）。一九八五年までの十〇年に比べると、一・四倍になっている。」とあり、ゲリラ豪雨と、いう命に係わる気象の変化が増加している。これらは地球温暖化が原因とも聞く。先に述べたカリフォルニアの大火災も地球温暖化により、乾燥が進み山火事が多発しやすくなっていることが原因と聞いた。地球温暖化により、今後ますますゲリラ豪雨は増加していくことが想定される。その時、身を手助けするのは、もちろん正確な天気予報だ。しかし、スマホを持っていない場合、電源が入らない場合などデジタルにはリスクがある。また天気予報では伝えてくれない、「一瞬の急激な変化」が一番命に係わる。しかし、「観天望気」を把握していれば、自分の経験と知識はすぐに役にたつ。まさに自分で自分の身を守ることができる。地球に生きている人間として、自然に敏感でいることが人の命を救

う。私はこれからも「観天望気」を意識し、データを集め、天災から人命を守ることの研究を続ける。

佳作

だれかを好きになるということ

前橋市立桃井小学校 六年

新池谷 悠

私は、うさぎを飼い始める前は、うさぎはだっこができる動物だと思っていた。その理由は、今まで私が出会ったうさぎは、そうだったからだ。友達が飼っていたうさぎ、「ピーボン」は、とてもおとなしくて、私の胸のところでじっとだかれていた。ピーボンは友達のうさぎだけれど、だっこするしゅん間が私にとって、一番心が落ち着く時間だった。だから、私はうさぎを飼いたいと思いい、うさぎを飼うことにしたのだ。

私は、昨年の六月二十五日に、念願だったうさぎを飼

い始めた。名前は未来^{みく}。通称「みーちゃん。」この未来は、私が待ち望んでいたうさぎとは全くちがう性格だった。だっこはできないし、毛なみも悪い、ついでに目つきも悪い。これは、うさぎというよりうえたハイエナのようなだった。私は失望したが、希望は捨てたくなかった。うさぎが私になれば、だっこできるようになると信じたかった。優しい言葉をかけながら、でも心の中では「こわい」と思いながら、私はうさぎをだっこする。未来は、私をけてにげる。いつもそのくり返しだった。

そんな未来のことを私は、「かわいくない」と思った。しかし、未来は私のうさぎ、別のかわいいうさぎと交換できない事も分かっていった。だから、私は、未来にけられるたびに、「未来はかわいい」と自己暗示をかけた。未来にも気持ちがある事を考え、仕方ないと思うことにした。しかし、本当は「かわいくない」、これが本心だった。二つの思いがいつも私の中でぶつかり合っていて、未来を心からかわいいと思えなかった。正直に言えば、私は、未来をかわいくないと思っていて、心が重く、

閉ざされている感じがした。

どうすれば、未来を「かわいい」と思うことができるのだろうか。私は、このことを、未来が家に来てからずっと考えている気がした。しかし、その答えはなかなか見つからず、この先もずっと出ないような気がしていた。

そして、現在。未来を飼い始めて約一年半が経った。私は、未来に対する気持ちが少し変わった。私は、未来のすべてに満足しているわけではないが、未来を素直に好きと言えるようになった。以前のようには、飼い主としての義務感から未来を好きと思うように努めたり、好きだと思えないことに苦しんだりすることがなくなったように感じる。それがいつ変わったのか、またその理由も分からないが、未来との生活を振り返るなかで、考えてみたいと思った。

未来は、友達からゆずり受けた小屋で生活している。それは、私が大好きだったうさぎ「ピーボン」が死んでしまつて、必要なくなったからだ。小屋の中には、ピーボンの干し草のおもちやがつられていたのだが、未来は、

このおもちゃをかじつて、あつという間にこわしてしまつた。私は、その残がいを見つけた時、ピーボンとの思い出をこわされたような気持ちになり、未来を大きらいだと思つた。

未来は、友達の知り合いを通して、ゆずり受けたので、友達の母も未来のことを気にかけてくれていた。未来の乱暴なところを心配して、「家で飼つてもいいよ。」などと言ってくれたくらいだ。私はその言葉にあまえて、夏休みに家族で旅行したり、お正月に遠方の祖父母宅に行く時などに、未来を預かってもらった。その時、友達の母が「最初より上品になったね。」とほめてくれたので、私は少しうれしくなった。とはいえ、未来は、友達の妹のバナナをうばつたり、おしっこをかけたらしらしく、上品とはほど遠い行動をしていたと、私は思つた。

昨年の夏休み、友達の家から帰つて来た未来は、一つよくないことを覚えていた。それは、えさがなくなつたり、退くつだと感じると、ケージのとう明なとびらに前足のつめを立ててひっかくことだ。ガリガリという音は

大きく、前足の上下の動きは非常に速いので、とてもうるさい。未来は、これを何度くり返す。私が名前を呼ぶと、一しゅんは静かになるが、それでやめることはない。だから、私は、未来の頭を手で強くおさえ「だめ。」と大きな声で言うのだ。そうすると、未来は、「ブーブー」と鼻で不満の音を鳴らしてくる。本には、『要求のたびに応えないのがいちばん。』と書いてあったので、私は無視することにした。しかし、未来はとてもがんな性格らしく、自分の要求が通るまで、それをやり続ける。未来がその行動をするのは、私達が食事をしている時、または、兄が受験勉強をしている夜間の時間帯が多い。私は、未来のしつけのために、本当は無視をし続けたい。しかし、兄は、私が未来の世話をさぼっているのだと思うらしく、「はるちゃん、早く、（えさを）あげて。」と、おこってくる。私は、仕方なく未来に牧草をあげることにし、未来のわがままが通る。兄がじゅくに行っている、母と私だけの時は、未来はこの行動をあまりしない。もしかしたら未来は、自分にあまい兄のことを計算して、

どしと食べなくなってしまった。それでも、私が新しい牧草を入れてあげないと、未来はその箱の中に入った。私は、「かわいいな、ベッドにするのかな」などと思ったけれど、未来はなんとその中でおしっこをしていたのだ。私は、びっくりして、がっかりもした。しかし、もしも未来が牧草を交かんさせるために、それをしたのであれば、未来は私が思っているよりも利口なのかもしれないとも思った。そして、牧草入れは元の状態にもどった。

未来の牧草入れは、よく空^{から}になっている。その時、未来はケージのとびらを引っかく他にもすることがある。それは、今年の春ごろ始めた行動で、トイレの周りをぐるぐる回るといふものだ。トイレは、ケージに針金で固定されているのだが、未来がそのせまいすき間に入ろうとすると、トイレは大きく横にかたむく。時には、トイレがひっくり返りそうになるので、それを見た人は悲鳴をあげる。未来のこの行動により、おしっこをふくんだトイレ砂やウンチがケージの外に飛び出たこともある。

行動しているのかもしれない。兄は、「みーちゃんは、おれに一番なついている。」とよく自まん気に話しているが、私は、兄は利用されているような気がしてならない。

未来は、食欲おうせいだ。毎日二回のペレットをとても楽しみにしているし、牧草もすごい量を食べている。チモシーロングという牧草、一キログラムを約十日で食べてしまうほどだ。しかし、未来は、牧草の中に好ききらいがある。穂の部分が一番好きで、いつも先に選んで食べる。次に好きなのは、くきの固い所で、やわらかい所は食べずに、小屋の下に落ちていくことが多い。牧草入れは、ケージの横に引っかけてあるが、未来は食べる時に、よく牧草を下に落としている。そして、下に落ちた牧草は、なぜかあまり食べない。昨年の夏ごろ、私は牧草を拾うことが大変になったので、縦、横三十センチメートル、高さ五センチメートル位の金属の箱に、牧草をたっぷり入れてあげることにした。未来は、食べやすそうだったけれど、以前にもまして、自分の好きな穂な

この行動は、未来の不満の表れなのだが、これをする一番おこるのは父だ。父は、未来に「あつとしない。」と注意をしているが、「あつと」とは香川県の方言で「周りの気をひくためにいやなことをわざとすること」だそう。私は、これは未来の行動にびつたりの言葉だと思った。しかし、父のこの言葉は、うさぎの未来に通じるはずもなく、未来は何度も例の行動をくり返す。そして、最終的には、父は未来に牧草をあげることになるのだ。未来は、父より強い。

しかし、未来は牧草よりも大好きなえさがある。ペレットだ。私が、毎日朝晩二回これをあげることになっている。あげる時間は、朝は七時、夜は二十時位と決まっています。未来はおおよその時間を覚えていて。だから、私は起床してすぐ、未来のペレットのさいそくにあうことになる。ペレットを十グラム量ってあげればいいだけなのだが、私は、朝一番にこの作業をしたくないことが多い。未来は、私の姿を見つけると、ケージ内では一番私に近い場所にやって来る。そして、目をそらそうとし

ている私に目を合わせようとしていたり、私の動きに合わせて、ケージの壁に前足をかけて、つたい歩きもする。私は、この行動をしている未来は、一見私になっているようにみえるが、本当は食べ物に弱いだけなのを知っている。

絶対に必要というわけではないが、『ウサギにはすっぱりと収まる場所にいると安心する習性がある』、『ハウスにもぐるとウサギが安心できる』と本に書いてあったので、昨年夏、父が木でハウスを作ってくれた。それをケージに入れると、未来は身体も大きいこともあり、部屋がせまそうに見えた。私が未来の好きなえさを中に入れてあげると、未来は、えさは中で食べた。しかし、そこでゆっくりくつろぐことをしてくれなかった。私も父も残念な気持ちになった。その後も、牧草を食べるための台として、それを利用することはあったが、ハウスは、私達が望んでいたような未来の落ち着く場所にはならなかった。最後には、ハウスの中で、おしっこをしていることを発見して、父の手作りハウスは、小屋からなくな

った。

次に、私が父のより一回り小さい、ダンボールのハウスを作った。三角屋根もつけて、かわいい感じに仕立てあげたのに、未来は、屋根の上に飛び乗った。三角屋根は無残にへこんで、V字のくぼみに変わってしまった。私は、この行動を「未来らしいな」とは思っただけで、残念には感じなくなっていた。そして、未来は、このハウスの中にも入らなかった。そこでおしっこはしなかったが、いつの間にかぼろぼろになったので、それも小屋からなくなった。

今年の夏、父母と三人でホームセンターに行った際、未来の遊び道具を探してみた。色々あったが、私達が興味を持ったのは、「メッシュトンネル」と「牧草で編まれた座布団」だ。金属製のメッシュトンネルは、丈夫で掃除もしやすそうだが、値段が二千円と高価。一方の牧草の座布団は、五百円と安い。しかし、冬の寒さ対策として買ってあげた布製ハウスに、未来が全く入らなかった経験を持つ私達は、今回の買い物は、少し慎重になっ

た。また、このトンネルで遊ばないことをおそれて、母は座布団をすすめたが、父は「（これは）一日でボロボロにする可能性がある。」と言った。全員がふだんの未来の様子を想像して、その通りだと思ったので、高価だけど、がんじょうな「メッシュトンネル」を選んだ。ケージに取り付けてみると、トンネルの下も通れること、メッシュだから開放感があることから、きゅうくつさを感じなかった。未来は、このトンネルは気に入ったらしく、よく中に入って遊んだり、リラックスしている。私は、初めて未来が喜ぶ買い物をする事ができて、うれしかった。

「みーちゃんは、一泊ぐらいなら一人で留守番できるよ。」父は、今年の春、未来に留守番をさせることにした。私は心配だったけれど、本にも一泊二日ぐらいの留守番は大丈夫だと書いてあったので、納得した。牧草は、小屋いっぱいに入れてあげればいいと思ったが、水はどのくらい必要なのか分からなかった。前の飼い主から、未来は「水をよく飲む」という引き継ぎはあったが、実

際にどれ位飲むのかを調べたことはなかった。これを機会に調べてみると、一日当たり三百ミリリットルほどの水を飲んでいたので、給水ボトル三つを取り付けてあげて、無事に留守番をすることができた。

本には、うさぎの一日の飲水量は、『個体差がある』、『新鮮な水をたつぷりと』などとしか書かれていない。そこで、私は、未来がどのくらいの量を一日に飲むのか、それは季節によって変わるのかを調べてみたいと思った。また、生き物にとって、水は欠かせないことは知っていたが、これがどのような役割をしているのかは分かった。だから、水が生き物にどのように役立っているのかも知りたくなり、夏休みの理科自由研究で調べてみることにした。

まず、私は、水の働きについて調べてみた。人間においては、四つの働きがあった。一つ目は、電解質を溶解すること。二つ目は、体温の維持と調節。三つ目は、溶ばいとなること。四つ目は、血液の流れの円かつ化。水は、私達の体の中で、色々な働きをしていることが分か

った。また、人間は、一日当たり約二千三百ミリリットルの水を出し入れしていることも分かった。うさぎについては、三つの働きがあった。一つ目は、代謝の要素。二つ目は、栄養素を運ぶこと。三つ目は、血液の元になることで、人間の場合と似ていた。水がなければ、人間は、四日から五日くらいで死んでしまうとインターネットにあったので、うさぎは、もっと短い日にちで死んでしまうのかな。

次に、私は、四月から七月までの間、未来が一日に飲む水の量を量り、それぞれの月の飲水量の平均を出した。その際、温度と湿度も計測し、飲水量と関係があるのかも調べた。

四月の平均温度は二十一・五度、平均湿度は五十・四パーセント、飲水量は四百九十二ミリリットル。それぞれについて、五月は二十三・一度、五十・三パーセント、五百六十八ミリリットル。六月は二十五・六度、五十六・二パーセント、七百七ミリリットル。七月は、二十七・八度、五十八・六パーセント、七百八十四ミリリットル

ことを不思議に感じた。うさぎの体温調節の方法は耳で、これを動かすなどして、熱を出している。私は、未来の右耳が動かない事を思い出した。未来は、片耳だけでは熱の放出が不十分なのかもしれない。私は、暑い時に冷たい水を飲むと、涼しく感じる。未来は、身体を冷やすために、飲む水の量が増えたのかもしれないと思った。人間は、身体に取り入れた水を、尿と便、汗、呼吸で外に出している。夏場に、水をたくさん飲んだとしても、汗の量が増えてるので、尿の量が増えたとは感じない。しかし、うさぎは汗をかかないので、呼吸で使用する水以外は尿で出していて、尿として出す割合は、人間より高いと思った。そこで、未来が飲んだ水に対して、どのくらいの量を尿として出しているのか調べてみることにした。

私は、七月二十五日から八月十七日のなかで十一日間、未来の飲水量と尿の量を計測した。この十一日間において、未来は、七百から九百八十ミリリットルの水を飲み、五百三十から七百二十ミリリットルを尿として出してい

で、七月に入ってから、就寝時以外はクーラーをつけていた。

未来が、一日に飲む水の量は、二百七十から千ミリリットルと、かなりの差があった。四月前半は、三百五十から五百ミリリットルの水を飲んでいて、四月後半に気温が上がると急に飲む量が増えた。未来の飲水量は、温度や湿度が上がると、増えていくことが分かった。また、温度、湿度共に上がった五月から六月は、飲み水の増加量が百三十九ミリリットルと、他の月の約二倍になっていた。一日ごとに見ると、気温の変化が激しい四月後半から六月は、飲水量の変化も大きく、飲む量が安定しなかった。これに対し、晴れて暑い日が続いた六月後半から七月にかけては、七百から九百ミリリットルの水を飲み、前日と比べて、百ミリリットル以上の変動があることは少なかった。私は、うさぎも人間と同じように、暑くなると、水をたくさん飲むことが分かった。

しかし、私は、汗をかくいて体温調節をする人間に対し、汗をかかないうさぎが夏場に、飲水量がこれほど増える

た。その平均は、飲水量が八百六ミリリットル、尿の量が五百九十五ミリリットルとなった。また、飲んだ水に対し、尿として出していた割合の平均は、約七十四パーセントだった。うさぎの身体に入る水には、飲み水の他にも食事（牧草・ペレット）、代謝水が考えられたが、牧草等はんそうしているので水分は少なく、代謝水も体が小さいので、合わせて五十ミリリットルと推測した。これを加算しても、尿の割合は七十パーセントとなり、人間は五十七パーセントだから、人間よりも尿として出す割合が高いと思われた。

私は、未来の飲水量を調べてみて、未来は、私の体重の十分の一もないのに、夏に六百から八百ミリリットルも水を飲んでることにおどろいた。また、未来は水を飲みすぎではないかと心配にもなった。そこで、飲水量についてインターネットで調べたり、桐生が岡動物園の飼育員さんに手紙を書いた。インターネットには、うさぎの一日の飲水量は、未来の体重（約二・五キログラム）だと、百五十から三百ミリリットルとあった。『うさぎ

は、体のわりにたくさん水を必要とし、同じ体重の犬の二〜三倍以上飲むうさぎもいる。』との情報もあった。桐生が岡動物園のうさぎは、一日に約二百八十から三百五十ミリリットルの水を飲んでいるとの事だった。

また、水をたくさん飲む理由としては、室温や湿度が高すぎることで、何らかの脱水症状を起こす病気があげられた。その他、換毛期にもたくさんえさを食べて、水を多く飲む。うさぎにとって適度な温度は十八から二十四度、湿度は五十パーセント以下なので、六、七月は、室温も湿度も高すぎたことが分かった。動物園では、暑さ対策として、扇風機で風を当てたり、凍らせたペットボトルを置く等しているようで、来年の夏は試してみたい。そして、八月から十月の未来の飲水量は、八百七十から七百八十ミリリットルで、多いまま推移しているので、観察を続けるつもりだ。

未来との一年半の思い出を書き出すなかで、私は、未来に対する気持ちを整理することができた。私と未来は出会った頃、お互いに相手のことが好きではなかった。

れど、やっぱりうれしい。えさを食べたら、自分が転ぶくらいの勢いで、小屋にもどったり、だきあげようとすると、後ずさりする。そんな未来の行動を見ても、悲しいというより、かわいいと思う。

未来は、乱暴であわてんぼう、また、おく病だけど好奇心おうせいだ。私は、少しがんだけど動物が大好き、そして未来が大好き。今は、心から「未来が好きだ。」と言える。

一年半、この一緒に過ごしてきた時間が、未来と私の両方を少しずつ変えてくれたことに気づいた。好きという気持ちは、無理には作れないことも分かった。未来の世話をする事、一緒に遊ぶ事、頭をなでる事、話しかける事。私は、これからもこれらを当たり前にし続けている、こう、と思っている。

未来は、前の生活の方がよかったと感じていたかな。そして、私は、未来より思い出の中の「ビーボン」が好きだった。私の心にはビーボンがいて、未来を好きになる努力も、未来をビーボンのようになっていたためだった。頭では、未来にも気持ちがあるのは分かっていたが、自分のこの望みを捨てることはできなかった。だから、私は未来をビーボンと比べては、思い通りにならない未来をきらいに思っていた。

それでも、私は、未来の世話をした。ペレットや牧草をあげたり、トイレや小屋の清掃。それは毎日の事で、面倒だけど、今では、歯みがきのように当たり前の仕事になっている。

未来は、今でもだっこはあまり好きではない様子だ。それでも、私がだっこすると、すぐにキックせずに、固まってくれる。それは、リラックスというより、がまんのように見えるが、私の気持ちに少し応えてくれているような気がして、私はうれしい。えさの時間は、私を目で追い続ける。起床時や勉強中は、少しうとうといけ

参考文献

「かわいいウサギ飼い方・育て方」

田向 健一監修 西東社

「ウサギの飼い方・楽しみ方」

町田 修監修 成美堂出版

サントリー次世代環境教育「水育」^{みずいく}

佳作

ぼくとほちようき

横浜市立さわの里小学校 一年

下館 優希

ぼくのなまえは、しもだてゆうきです。男の子です。七さいですがながわけんよこはましにすんでいます。ぼくの、かぞくしようかいをします。パパとママといもうと二人とぼくの五人ですんでいます。

ぼくは、みみがきこえにくいです。みぎのみみが小さくてあながあいていません。ひだりのみみは大きいけどみみのあながほそいからです。じこにあつていません。あかちゃんのところからです。なのでほちようきをつかいました。ほちようきをつけるときこえます。ほちようきはずすときこえにくいです。がつこうで、ほちようき

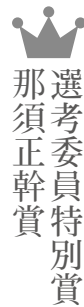
をつけている人は、ぼく一人。どうとくでは、みんながこえをだしているからうるさいです。はずすのは、プールにはいるときとおふろにはいるときとよるねむるときにはずします。ぼくのほちようきは、バンドになっています。あたまのみぎのうしろにつけます。みんながしつてるほちようきは、みみにかけておとをきいています。ぼくのちがいます。ぼくは、バンドのほちようきをつかってたけどおとがきこえにくくなったのでしゅじゅつをしました。とうきようのびょういんにいききました。しゅじゅつをするためにけんさをしました。たいじゅうとしんちようをはかりました。おしっこけんさどちのけんさときかいにはいりました。しゅじゅつをするまえのひにびょういんにいききました。しゅじゅつをするひは、あさごはんはなしでした。あさからしゅじゅつをしました。しゅじゅつしつへいくまえにしゅじゅつのおようふくをきてあるいていききました。こわくてなきました。にげました。しゅじゅつしつのまえまでままといっしょにいききました。ベットにねました。てに、はりをさしててんて

きをしました。マスクを口につけました。ねむりました。ぼくは、いたいかなあとおもいました。マスクがこわいからなきました。きづいたらおわったとおもいました。ベットでへやへかえりました。つかれました。やすみしました。よるごはんは、ジュースをのみました。

つぎのひは、トイレにいくときあるけるようになりました。ひだりのみみのうしろにきずがあります。いたくありません。ままのしやしんでぼくのきずをみました。しやしんでみるとぼくは、びっくりしました。てんてきは、たいいんまでしてました。ひだりては、てんてきをしていたのでうごかなかったです。ぼくは、しゅじゅつをするまえにいもうとにあいたかったです。さびしいからです。

たいいんしていえにかえりました。いえにかえれてよかったです。しゅじゅつは、十月にやりました。あたまの中のきかいをつかえるのは、十二月です。いまは、バンドのほちようきです。ぼくは、おとがきこえるのがたのしみです。いまは、しゅじゅつしたばかりなので、な

らいごとプールは、できません。十二月になったらはいれます。たのしみです。ぶつけない、みずにぬらさないをまもります。十二月、じんこうちゅうじになったら、ジャングリズムとドッチボールとてつぼうとおいかけてことプールをやりたいです。



選考委員特別賞
那須正幹賞

鹿野の自然を未来につなぐ ジュニアドクターとしての 任務

鳥取市立鹿野学園 六年

田村 綾梨

「地球を救うために環境問題に取り組む。」私は、小学五年生の夏から鳥取大学ジュニアドクターとして勉強を続けています。一年間の基そプログラムを受講し、その後、選抜試験を受け、今は探究プログラムの水環境問題に取り組んでいます。私が環境問題に興味を持ったのは、私がくらす町を守りたいと思ったのがきっかけです。私の通っている学校の近くは、鳥取市の中でも自然が多く、山や川、海などに囲まれています。

学校に行くためには、列車とバスを乗りつぎます。山いんで一番きれいな白兎海岸（日本海）や梅雨の時期にはとてもきれいなアジサイ公園をながめながら列車にゆられ、浜村駅まで行きます。その後、地元のバスに乗り、とももろこし畑や蓮の花畑、牧場のアイスクリーム屋さん、温泉を通過して学校へ行きます。季節によって見える景色が違うので、とても楽しいです。

海の近くの学校は、海岸掃除をしています。また、山や川の近くの学校もそれぞれ地域の方と一緒に掃除します。私たちの学校もクリーンクリーン活動という名前です。自分たちの住んでいる場所を地域の方たちと一緒に掃除をします。だから、私たちの通学路はいつもきれいです。

私は、鳥取市の小規模転入制度を使って少し遠い学校へ通っています。中山間地域にある学校が過疎化でなくなってしまうようにするため、遠くからでも通えるようにした制度です。各学校で面白い取り組みをしています。

私の通う鳥取市鹿野町は芸術がとても盛んです。青山

学院大学の先生と学生の皆さんや鳥の劇場の方たちが、コミュニケーションの授業をしてくれます。とても楽しいです。海外や県外からたくさんの方々が集まる芸術祭もあります。自然豊かな場所ので、週末だけ開くカフェやお店が出て、人気があります。カフェのお水も町にある湧き水を使います。とても冷たくて美味しいです。

学校は、城跡にあり、運動場は本丸跡地です。給食は、お城のような作りの校舎の中で全校で食べます。地元でとれた食材を使うのでとてもおいしいです。特に、小麦粉を使わずお米を使った米粉パンは、もっちりしてとてもおいしいです。鳥取の牧場で作られた牛乳は、全国一おいしいと思います。冬にはカニも出ます。梨やカキもおいしいです。学校に行くのがとても楽しく、自慢の学校です。

学校の登下校はみんなで遠回りしながら帰ります。通学路の脇にある水路の水はとてもきれいです。底まで透けて見えます。さわってみたら、夏なのにひんやりしていました。今から四百年前に水路が出来て、今も生活に

使われています。学校のお堀の池にいるコイにえさをあげるのも楽しいです。学校のとなりには温泉もあり、時々行きます。家に温泉がある友達もたくさんいます。自然がたくさんある町で毎日わくわくした気分です。学校に通えることがとても嬉しいです。そしてこの自然を守らなくてはいけない、という気持ちがある中で大きくなってきました。

私が五年生の時、鳥取大学で行われるジュニアドクターの募集用紙を見ました。学校からもらったきた手紙で、「地球を救うために環境を守る」というテーマで小学五年生から中学三年生までの生徒四十名を募集することでした。すぐに、私は「やりたい！」と家族に伝えました。二つ上の姉も一緒に試験を受けることになりました。鳥取、島根、兵庫から生徒たちが集まり選抜試験をしました。一次試験は、書類選考、自己PRや志望動機などを記入しました。二次試験は、理科の筆記試験（中学の範囲もあり、難しかったです）グループで実験をするテストもありました。課題が与えられ、それぞれ

の班で実験をし、結果を全体の前で発表します。すべてを先生がずっと観察していました。緊張しましたが、無事、平成二十九年鳥取大学ジュニアドクター基礎講座を受講できる資格をもらえました。そう、私は姉と一緒に合格しました。一年間、私は鳥取大学や米子高等学校の先生から専門的な授業を受けることになりました。授業を受けた後は、必ずレポートを提出します。先生の授業を受けるために、たくさんメモをとったり、大学の学生の方に質問をしたり、図書館で本を借りて読んだり、自分なりに努力をしました。姉も同じ講座を受講していたけれども、成績もつくとのことだったので、お互いに相談したり意見を言いあったりはしましたが、レポートを見せ合うことはしないというルールを作りました。

初日は、染色体についての勉強でした。染色体を顕微鏡で確認する実験もしました。染色体には、セントロメアとテロメアというものがあることを顕微鏡で見て確認できました。次にイオン液体についての授業を受けまし

た。私は、とても興味を持ちました。毎日のようにイオン液体についての動画を見たりしました。クリスマスプレセントに、イオン液体を本気で欲しいと思いました。動物にインフルエンザの予防接種をするとき、ショックで死んでしまうことがあるそうです。第三の液体と言われるイオン液体でインフルエンザの予防接種のかわりに湿布で予防できる研究が進んでいると聞きました。とてもうれしかったです。私もインフルエンザの予防接種は痛いので嫌いです。私は、大きくなったら湿布をつくりたいと思いました。

鳥取大学で有名なキノコの講座も受けました。食べても良いキノコや毒キノコなども紹介してくれました。キノコの細胞なども調べました。いつも食べているキノコの不思議も教えてもらいました。私たち人間にとってキノコはとても大切な存在です。自然からキノコがいなくなったら、人間は生きていけません。キノコなどの菌類は木や葉を食べて分解します。だからキノコがなくなったら森や林が汚くなってしまうと思います。

米子高等専門学校では、水質調査について勉強しました。きれいな水でも本当は汚れていることがあるということを知りました。

また、卵の内皮を利用して発電出来る実験もしました。卵の内皮は、食べ物を保存するとき、まいておくとき保存効果が長持ちすることも知りました。

鳥取には、鳥取砂丘があります。小さい頃から遊びに行っていた思い出のあるところです。しかし、世界には砂漠化が進み、地球が危なくなっていることを知りました。ゴビ砂漠では、砂嵐などにより被害が多くあります。人や動物にも影響があります。黄砂のしくみも勉強しました。ゴビ砂漠のラクダも砂嵐によって涙がとまらないアレルギー症状が出ているそうです。砂漠化を防ぐためには、植物を増やし砂が飛びにくくしたいなと思います。また、植物を植えるために水が豊富など、水を蓄えて砂漠で植物を育てることが大切だと思います。サボテンの中に水を蓄えるような開発が出来たらいい

いなと思いました。

鳥インフルエンザについての勉強も興味を持ちました。鳥インフルエンザウイルスのルーツを聞きました。私たちの生活にも影響を与えるので、予防策などを考える必要があると思いました。

ジュニアドクターの講座では、約一年間大学生と同じような内容の授業を受講しました。休日、朝からお弁当を持って授業を受けます。休みの時間に先生や各地から来た友達と話をするのも楽しかったです。大学の先生と一緒に大学の食堂でご飯を食べながら、学校の様子を話したり、質問をしたりして休憩の時間はとても楽しかったです。

最終日には、まとめテストがありました。筆記テストで、難しかったけれども、自分なりにレポート作成頑張ってきたので良かったです。成績もつきました。学校でもらう通知表みたいにABCと評価されました。私は今まで一番集中して頑張ったのでとても満足しました。

私は、もっと勉強したいと思います、環境基礎プログラム

を終了した人にチャンスがある「環境探究プログラム選抜試験」を受けることにしました。姉も一緒に試験を受けました。基礎プログラムの成績と面接テストから選抜されます。面接官の先生四人の前で一人ずつ質問に答えました。学校の様子なども聞かれました。私の通う学校へ見学してみたいなど面接官の先生が言われたのでとても嬉しかったです。面接の時間はとても楽しく感じました。たくさん質問されて、思っていることを話しました。試験官の先生が笑ってくれたりもしました。姉も楽しかったと言っていました。そして、私も姉も一緒に選抜試験に合格しました。小学生は私ひとりだったので、合格した後、少し緊張しました。これから二年間かけて専門的な授業や実習をすることになると思うと、ドキドキしました。

私は、中でも米子高等専門学校で研究している水質調査に興味を持ったので、高専コース水環境の調査と浄化方法について学ぶ講座を受講することにしました。

中学二年生のお兄さんと私と先生で水質調査の勉強が

中海の水を取り入れて、池が出来ています。昔は、池がきれいで水遊びなどをしていたと聞きました。しかし、高度経済成長期に米子市の産業が急速に発展したため、中海周辺に工場や家がたくさん建つようになり、工場用排水や家庭用排水が大量に排出されたことにより池の水が汚くなったそうです。少し前までは、ヘドロで嫌な臭いもしていたそうですが、今は、昔のきれいな池に戻すため二〇一四年から池の清掃活動と浄化活動をされ、今は少しずつ改善されてきたと教えてもらいました。私も実際に胴長という作業着をつけて池の中の水をかき混ぜる湖底耕耘作業に参加しました。湖底耕耘とは、くわやアルミレーキを使って池の底にたまっているヘドロに酸素を入れ、ヘドロが減少していくようにする作業です。とても大変な作業です。

テレビなどで、池の水質改善の為に池の水を抜く池干しという方法があると聞きますが、私たちが調査している湊山公園日本庭園の池は景観上大きな機械などを取り入れることは出来ないで湖底耕耘という方法を使って

始まりました。分からないことは随時、先生にメールを確認します。初めての日は、研究室の見学をさせてくれました。これからのように進めていくか、学生さんとも交流をしました。一緒にお弁当を食べているとき、水質調査をしている学生さんはほとんどが水泳が大好きだと教えてくれました。私も、幼稚園から続けている水泳が一番自信があります。一緒に勉強することになった中学生のお兄さんも水泳の選手だといっていてなんだか私たちの距離が縮まり、楽しく勉強できる感じがしました。水質調査は、池の中に入って調査するからかなあなんて勝手に考えたりもしました。でも、分からないことは丁寧に真剣に説明してくれました。

私たちのチームは、汚くなってしまった池の浄化活動を通して水が汚れる原因などを調査します。

米子高等専門学校がある米子市には中海という海があります。私の祖父母が子どものころはタイや沢蟹などといって透明度が高いきれいな海だったそうです。中海と隣接する湊山公園日本庭園の池も同じです。一本の水路で

水質改善をしています。

夏休みに、高専の皆さんと一緒に湊山公園日本庭園の池の湖底耕耘を行い、ヘドロと水質の調査を私もしました。

まず、湊山公園日本庭園の池の汚れの関係を調べました。湊山公園日本庭園の池は、主に三層に分かれています。ことが分かりました。上から一層目の水は、低塩分で水に溶け込んでいる酸素の量が高いです。この酸素の濃度のことを溶存酸素濃度といいます。溶存酸素濃度が高いということは、酸素がたくさん含まれていることになるので、水がきれいといえます。

二層目は海水です。この水は塩分が高く溶存酸素濃度が低いです。つまり汚れているといえます。

三層目はヘドロです。プランクトンや腐った藻、魚の死がいなど有機物が下にたくさんたまり、ヘドロになると酸素の量が減ります。酸素が減ると生物は息が出きなくなり、エサとなる食べ物をとることが出来ません。そうすると、その生物たちも次々に死がいとなってヘドロ

にかわっていきます。

この状況が長く続くと、底の水にはもう生き物が住めなくなってしまう、さらに水が循環しにくい状況が生まれてくることが分かりました。

調査方法としては、水にどれだけ有機物が含まれているか示す科学的酸素要求量(COD)をバックテストで調べました。また、水の中に含まれている酸素の量(DO)を専門の機械でかりました。イオン濃度を示すPHや泥の状態を数値であらわした三還元電位(ORP)も別の機械ではかりました。水の中に含まれる塩分の値や懸濁物質の値も調べました。最後に、ヘドロを乾燥させて泥の中に含まれている有機物の量を調べる強熱減量の値も調べました。これらの調査をするために、先生から借りた専門書を何度も読んだり、インターネットで調べたりしました。

米子高等専門学校が中海で調査した結果と湊山公園日本庭園の池の調査した結果から汚れ方がほとんど同じということが分かりました。強熱減量の値が汚濁の目安で

ある十三%に近いことから底にたまっている泥はヘドロ状に近いということも分かりました。

しかし、二〇一四年に湖底耕耘を始めた時よりも値が改善していました。みんなの努力があったからだと思います。汚れる原因は池が閉鎖的であり、汽水であることから水が循環しにくいということが分かりました。

今後は、湖底耕耘はたくさんの方の力と時間が必要なのでその効果の検証を調べる予定です。来年はさらに深く勉強していきます。

私は、勉強すればするほど、どんどん水環境に興味を持ちはじめました。特に鹿野町の水はきれいと言われているので調べたいです。

ジュニアドクターの講義で勉強したことを広くみんなにも伝えたいと思いました。

そして、私の通う町「鹿野町」を守りたいという気持ちを込めて「鹿野のきれいな水を残そう！水質検査をして分かったこと」というテーマで今年の夏休みに調べてみました。

鹿野の町には四百年ほど前に作られた水路が今もあります。

学校の前には天然の鮎などが育つ河内川が流れています。人々の生活に欠かせない水はとてもきれいです。

近くには、布勢の清水という湧き水もあります。湧き水は、水路を通過して生活用水として使われます。昔は、お風呂を沸かしたり野菜を洗ったり、夏にはすいかやなす、きゅうりなどを冷やしたりしていたそうです。学校裏の田んぼの水も透き通ってとてもきれいです。

まず水質調査としてどれだけ汚れているかのバックテストをしました。気温は三十八度を超える猛暑日でしたが、水温は十三度から十六度に保たれていました。米子高等専門学校できれいな水でも汚れていることがあるというのを勉強したので、とても心配でした。

しかし、鹿野の水は飲み水としても使用できるほどきれいでした。不思議に思い、町の人にインタビューをしてみました。なぜ鹿野の水はきれいに保てているのか？私は、何か特別なことをしていると思っていました。しかし町の人々は口をそろえて「特別なことはしてない

よ。」とっていました。考えてみると私の通学路はと

てもきれいです。バスを降りて城下町を通過して、学校へ行きます。通学路には、ゴミが落ちていません。水路の水も透明できれいです。また、京風の格子構えを備えた町家が建ち並び、和紙で作られた風車と川柳が飾られています。

家々の玄関先がどの家もきれいにされているのです。日ごろからの温かいおもてなしの心がきれいな水を守っていると思います。

しかし、鹿野城跡公園のお堀の池は、ジュニアドクターで調べた米子市の湊山公園日本庭園の池と同じように汚れていました。原因は、池が閉鎖的であるため水が循環しにくいことだと思います。

ジュニアドクターの活動で、湖底耕耘はとても大変な作業でした。たくさんの方の力や時間が必要です。一度汚なくなった水をきれいにするのは、とても大変だということが分かったので、これからは清掃活動やエコ活動をしていきたいと思いました。

ジュニアドクターとして、できること。

それは、一人一人が環境問題に関心を持ってもらえるように情報を発信することだと思っています。いろいろな場で発表する機会をもらって、みんなに知ってもらいたいです。その発表を聞いた人も、このような取り組みがなくならないように、後世に伝えていってほしいと思います。

今、私が取り組んでいるのは、汚れてしまったものを改善する方法です。湖底耕耘も清掃活動も改善方法のひとつです。これらの活動は続けていく必要があると思います。清掃活動や湖底耕耘活動を体験してみて、大変だったけれども、その取り組みをするからこそ良い結果が出ます。一度汚れてしまったら、元に戻すのはとても大変です。清掃活動は私たち小学生でも続けることはできると思います。日ごろの掃除をしっかりとりたいと思います。

また、清掃活動は、その場をきれいにすることもできますが、それ以上に人の心をきれいにすることもできると 생각합니다。

ター環境探究プログラム受講者として、まだまだ私は勉強を続けます。伝えます。地球を救うために、鹿野町を守るために私は鹿野の自然を未来につなげます。

鳥取市鹿野町の水環境は恵まれています。私たちがおばあちゃんになっても、きれいな水であってほしいと思います。そのためには、少しの努力と優しさが必要だと思います。

私は、これからもずっと勉強を続けたいと思います。私たちがおばあちゃんになるころには、地球の環境も変化してくるとニュースで聞きました。環境問題にみんなが少しでも目を向けることができるように私は、努力していきたいと思っています。まずは、鳥取市鹿野町の水を守りたいです。みんなが住みやすい町を大切にしたいです。そして、私たちの地球の環境を守りたいです。みんなと一緒に守りたいです。

私はジュニアドクターとしての任務を、最後まで果たしたいと思っています。今、十一歳の私が思うことは、自分の住む町は自分で守る。努力する。そして優しい心を持つことが大切ということです。思いやりの心を持つことが環境を守る力だと思います。

平成最後の年、平成三十九年度鳥取大学ジュニアドク

選考委員特別賞
最相葉月賞

がんばりマン

うるま市立天願小学校 一年

名護 翔哉

ぼくは、ちょっといいしゅっ生たいじゅうじで生まれま
した。五百八十六グラムと、とても小さかったそうです。
四百四十グラムくらいに、たいじゅうがへったときもあ
ったそうです。おとうさんとおかあさんはとてもしんば
いしたそうです。

家にある赤ちゃんのころのしやしんをみると、ほいく
きに入って、たくさんチューブにつながれているしやし
んばかりです。それを見ると、とてもいたそうです。
おかあさんは、

「しやしんを見るだけで、おもい出して、なみだが出る

いて、それを見て、おかあさんもいっしょにないたそう
です。

おかあさんは、こえが出ないぼくに、こえが出なくて
も、耳がきこえるからと、いつもぼくにはなしかけたり、
えほんのよみきかせをしていたそうです。

りよういくいりようセンターへ、げんごくんれんにか
よったり、つうしよにかよったりしました。つうしよに
は、かんごしさんいました。からだのふじゆうなおと
もだちも、ぼくとおなじ、きかんせつかいをしたおとも
だちもいました。

4さいになったころ、つうしよの先生から、ちいきの
ようちえんや、ほいくえんをすすめられたそうです。ぼ
くは、きかんせつかいをしてるけど、からだはうごける
から、ぼくがもつとせいちょうできるはずだからと、い
われたそうです。

おかあさんは、きょういくいいんかいや、ようちえん
に、はなしをききにいったり、そうだんをしたりしたそ
うです。それで、てんがんようちえんにかようことにな

よ。」

と、言います。ぼくも、それをきいて、なみだが出そう
になりました。

ぼくは、うまれてすぐに、じんこうききゅうきをつけ
たり、ゆけつをしたりしたそうです。のうしゅつけつや、
みじゆくじもうまくしょうという、目のびようきにもな
りました。まだ、体がちゃんとできていないときに生ま
れたから、ぼくは、はいも弱くて今でも、まんせいはい
しつかんというびようきです。それから、せいもんかき
ようさくというびようきです。そのために、のどにあな
をあけるしゅじゅつをしました。それを、きかんせつか
いと言います。おとうさんとおかあさんは、4か月のぼ
くののどにあなをあけるのは、とてもかなしくていつば
いないたそうです。でも、ぼくが生きるために、ひつよ
うなしゅじゅつだから、けっしんしたそうです。

ぼくは、赤ちゃんのころからきかんせつかいをしてい
るから、こえが出なかったそうです。だから、ないてい
るときは、いつもたくさんなみだをポロポロながして

りました。

すみれぐみに、にゅうえんしたときは、みんなげんき
なおともだちばかりだったから、びっくりしました。か
らだのふじゆうな子もぼくみたいなきかんせつかいをし
ているおともだちもいませんでした。

「これなに?。」

と、きいてくるおともだちもたくさんいました。みんな
ふしぎそうに見たり、さわってきたりしました。

ぼくは、かぜをひくとたんが多くなります。そのとき
は、少しにおいがします。おともだちに

「くさい。」

といわれたこともありましたが、とてもかなしくてないて
しまいました。ぼくは、なんでみんなとちがうのかな?
と、おもうときがあります。でも、そのときに、たかこ
先生がチクチクことばとふわふわことばのおはなしをし
てくれました。

ぼくの心もチクチクいたかったです。ぼくは、おとも
だちにチクチクことばはぜったいにつかわないでおこう

ときめきました。

二年かん、天がんようちえんにかよって、いまは天がん小がっこうの一年生です。

ぼくは、みんなとちがうところがあるけど、ぼくにできることをがんばりたいです。

ぼくには、赤ちゃんのときからのおともだちの、はなちゃんがあります。はなちゃんも、ぼくとおなじ、きかんせっかいをしています。

でも、はなちゃんは十一月七日にのどをとじるしゅじゅつをしたそうです。ぼくは、そのはなしをきいたとき、うれしくてたまらなかつたです。おかあさんと二人で

「はなちゃんスゴイ。」

「よかったね。」

と、手をとってよろこびました。

ぼくもいつか、はなちゃんのようにとじることができたら、やりたいことがあります。

水えいもならってみたいです。そして、みんなとおなじブルーに入りたいです。

やりたいことをかんがえるだけで、ぼくはワクワクしてきます。

おとうさん、おかあさん、いつもほんとうにありがとう。

おとうさん、おかあさん、ぼくもとじれる日まであきらめずにがんばるよ。

だってぼくはがんばりマンだからね!!



選考委員特別賞
リリー・フランキー賞

へアドネーション、夏

LCA国際小学校 二年

白井 こはる

いよいよだ、と思った。

大きなかがみに頭の先から太ももまでうつたわたし。かがみにうつたママはドキドキしているように見えた。

きよ年の夏休み、みさきにひさしぶりに会った。

「あら、みさきちゃん、かみ切ったの？」

とママが聞くと、

「へアドネーションしたの。」

とみさきがこたえた。

「あらあ、えらいわねえ。」

とママがほめた。

「へアドネーションって何？」

と聞いたら、

「びよう気でかがぬけてしまった人のために、かみをきふしてウィッグを作ってプレゼントするんだよ。」

と教えてくれた。

みさきはすぐかつこよかった。

「わたしもやりたい。」

すぐにやりたくなった。

「じゃあ、おうちでしらべてみようね。」

とママが言った。

おうちについたら、ママはしらべることをすっかりわすれてしまってテレビを見ていた。

「へアドネーション、しらべないの？」

とママに言った。

「ああ、すっかりわすれてた。ごめん、ごめん。」

とママはわらった。

びよう気の子がまっているのに、のん気だなあと心の

中で言った。

「あ、む理かも。」

とママがパソコンにむかって言った。

「何で？」

とママのせ中にむかって言った。

「三十一センチい上ないとダメなんだって。今の長さで三十一センチも切ったら、かりあげになっちゃうよ。」
くるっというが回ってママの顔が見えた。

「かりあげって何？」

「こんなかんじ。」

ママはテレビをゆびさした。テレビには高校野きゅうのせん手がうつっていた。そのかみの毛はとってもみじかくて、かりあげはいやだと思った。

「来年だね。」

とママが言った。

「来年ならかりあげにならない？」

「うん来年なら大丈夫。」

わたしは来年の夏が早く来ないかなあとと思った。

二年生の夏休みにヘアドネーションをするときまつてからの一年間は、大へんだった。

ごはんのたびに、

「かみ！」

と、注いされた。

かみがのびて、みそ汁の中に何とも入ってしまった。

「ちゃんとしばりなさい。」

と言われても、わすれんぼうなので、すぐわすれてしまう。みそ汁につけた時はそんなにこわくはないけれど、カレーとかミートソースにつけるとママはすごくこわい顔で、

「かみ！」

とおこった。あわてて顔を上げると、かみの先についたカレーが、今どはようふくにふでで絵をかいたみたいについた。

この時のママは、本当に目が三角になっていた。すごくこわかった。

何ども何ども、おこられて、やっと今年の夏休みがやってきた。

今年の夏はびっくりするくらいあつかった。「もうしよ」という言葉をはじめて知った。何どもニュースで言っていたから。

「もうしよだから、さつばろに行つた時にむこうでヘアドネーションしよう。」

とママが言った。

ヘアドネーションが出来るびよう室は、うちの近くにはなくて、電車にのって行かなきゃいけないので、ばあちゃんのすんでいるすずしいさつばろでやることにした。

ひ行きの中で、長いかみの毛をゆびでくるくるした。かえりのひ行きにのる時には、このかみはわたしからもうなくなっているんだなあとと思った。

さつばろのばあちゃんに会ってすぐ

「ばあちゃん、わたしヘアドネーションするんだよ。」

と言った。

「なあにそれ？」

と聞かれた。何となくだけど、ばあちゃんはヘアドネーションを知らない気がしたので、みさきみたいにせつ明をした。

「こはちゃんはえらいねえ。」

と、ばあちゃんにほめられて、うれしかったすつごく。

スマホでママがびよう室のよやくをとった。

わたしは、ばあちゃんちのカレンダーにボールペンで

「ヘアドネーション」と書きこんだ。

「三才までぜんぜんかみの毛がなかったのに、人さまにきふ出来るようになるなんてねえ。」

ばあちゃんは、わたしではなくカレンダーを見て言った。

自どうドアがグイーンとあいた。中にいた男の人が、

「白井さまですね。」

とこつちを見て言った。

あん内されたせきにすわった。大きなかがみにうつつたわたしの首にタオルがまかれた。少しくるしい。つぎに黒いひんやりしたシートを首にまかれ、その上からママがびよう室でよくきてるボンチョみたいなのをきせられた。

がまんしようと思ってもニヤニヤしてしまう。かがみの中のびようしさんが

「きんちようしてる？」

と聞いてきたけど、ドキドキして何も言葉が出なかった。

「生まれた時からかがみが少なくて、ぜんぜん生えてこなかったんで、びよう室で切るの初めてなんですう。」

とママがわたしのかわりにこたえた。

「うわあ、うれしいなあ。じゃあぼくが人生で初めてのびようしさんですね。」

かがみの中で、びようしさんが大きな口でわらっていた。

かみをゴムで十くらいに分けていく。

「さいしょのやつは自分で切ってみる？」

と、びようしさんがかがみの中のわたしに聞いた。

え！自分で切っていいの？

少しこわかったけど、ゆう気を出して、うん、とうなずいた。

「このゴムの少し上を切ってね。」

と言ってハサミをわたされた。おうちにあるどのハサミにもにっていないスリムなハサミだった。

ハサミのもつところにゆびを入れた。ぜんぜん力を入れていないのに、パラパラとわたしのかみが切れてはなれた。

ぜんぶのかみがわたしからはなれていく。

「すごくいいかみです。このかみしつなら、びよう気の子がやりたいかみがた、何でも出来ると思います。」

と、びようしさんが言った。

「そうですかあ？まい日みそ汁の中につかっていたので心ばいだったんですね。」

とママがよいいなことを言った。

「じゃあ、のちほどパーマやカラーリングをしたことが

あるかなどを書く紙があるので、そこにみそ汁で書いて下さい。」

と言って、びようしさんがわらった。

「じゃあ、ここからかわいくととのえていくよ。」

と言って、びようしさんがコテをとり出した。かみの毛をつかんではずすと、くるんと内がわにかみが丸まる。

くるん。くるん。

くるん。くるん。

かがみの中でわたしのかみが、どんどん丸まっていって、本当にかわいくなっていく。

「ママ！わたし、本当にずっと前からこういうかみがたになりたかったの！」

自分でもびつくりするくらい、大きな声が出た。

お金をはらって店を出る時、

「また三十一センチのばすには三年かかるんだよ。もし、またヘアドネーションをしてくれるなら、五年生になっ

たらおいでね。」

とびようしさんが言った。

また、やりたいなあと思った。

ばあちゃんにもどると、

「あら、かわいくなつたねえ。」

とばあちゃんがわたしをだきしめた。

その夜、わたしのかみをもらう子はどんなかみがたにするのかなあと考えた。コテでまくとくるんとなつてかわいくなることを教えてあげられたらいいのになあと思った。

つぎの日の朝、ばあちゃんが

「さあ、今日も金足のうぎょうをおうえんしよう。」

と言ってテレビをつけた。

テレビの中に、今年もたくさんのかりあげがつつていた。



大賞

日常が崩れた日

非日常が日常になった日

広島市立瀬野川東中学校 二年

金本 菜々実

七月六日、大雨警報が出たことにより私が通っている中学校は休校になった。金曜日だったため三連休になる。そう、この時私はまだ、明日がいつも通りに来ると思っていた。いつもの警報。いつもの少しばかり強い雨。だから、少し強い雨音にしても別に、何とも思っていないかった…。

昼ごはんを食べて、まあ、時間を潰した。そして夕方。母と、明日もう少し雨が弱まったら、一緒に買い物に行こうね。」と約束をした。明日の、約束。その話が終わ

って少しして、姉から電話がかかってきた。父が迎えに行ってから、まだあまり時間がたっていないから姉の所へは着いていないはずである。何かと思い電話にでてみると、会社の近くでずっとサイレンが鳴っていて怖い。ずっと鳴ってる。今までこんなのがなかったし…。家の方も地鳴りとか、注意しとってね。」と言われた。今まで、こんなことを言われるのは初めてだから、私もそれに警戒することにした。地鳴りを警戒しろということとは、土砂崩れが起きるかもと言っているのだ。私は今、二階にいますので、雨が降っているが外の音が聞こえやすいように窓を開けた。雨の音がクリアになってよく聞こえる。外の音に注意していると、地域の放送が聞こえてきた。少なくとも私が生きてきた十四年間で、一度もこの地域の放送は聞いたことが無かった。緊急事態だと思い、窓：網戸に耳をつけて身をのり出して聞いた。緑坂が避難勧告でたやら、避難場所は瀬野福祉センターだやら、避難する人は独自の判断で避難するように。と言っていた。すぐに姉に連絡した。何度やっても出ない、というか、

つながらない。焦った。姉の方が無理なら父の方なら、と思いつちの方へ電話をかけた。割とすぐに出た。姉が。何でも姉は現在、川の状態の動画を撮っているようで、電話に出られなかったそうだ。私は放送があったことを伝え、動画を見せてもらう約束をし、電話を切った。そして、一階にいる母に放送の内容を伝え、二階に戻った。ちなみに、この放送だが、音割れが酷く窓を開けて網戸に耳をつかせないと内容はほとんど聞きとれない。窓を閉めでもしたら、まったく聞こえない。放送したのかしてないのかもわからない程にだ。それから少しして姉が帰ってきたので、例の動画を見せてもらう。どこの川も水の量が多かった。私たちの住んでいる上瀬野町清山団地の川はほとんど氾濫寸前だった。今までに見たことの無い量の水が激流となって流れている。ただ、氾濫まではいかないかな。とこのとき私は思っていた。

夕飯の後、明日は休みだから今日は風呂入らなくていいかなー。と私は思っていたが、家族に「風呂一応入った方がいいんじゃない？」と言われたので入ることにした。しかし、このとき私は何故か動悸が起こっていたのでこれがおさまってから入ろうと思ったのだが、はやく入った方がいいんじゃないかと家族に言われ、自分でもそう思ったため、風呂に入った。風呂に入っていると、風呂の電気が一瞬チカチカとした。これは、はやく終わらせたい方が良くも思えない。と思い急ぎ髪を洗って泡を流そうとすると、バチッ電気が消えた。真っ暗で密室な空間の中、流しっぱなしのシャワーの音だけがきこえて、すぐ姉が光をもってきてくれた。母が、まだお湯が出ているうちに髪流しんさいというので、急いで風呂場に戻り、髪を流す。けど、私はそれなりに髪をのばしていたから、流すのに時間がかかった。お湯がだんだんつめたくなっていく。終いには、水になった。それでも泡がなかなか流れないから水で流した。冷たかった。寒かった。流し終わって服を着ている最中姉は明かりを置いていった。スマホの懐中電灯の機能を使って光が上に来るように置き、その上に水の入ったペットボトルを置いて簡易的なランタンにしていた。そのころ母は、

台所の水を出そうとしてみたがはい、断水ーと言っていた。水も止まったようだ。とりあえず、光源となるものを家から集めた。姉が中学の技術でやった、エコキユーブラジオも持ってきた。何せ、自分で発電させて、光が付くようになるのだ。ラジオをきくこともできる。

午後八時過ぎごろ。父は二階で休んでいた。が、降りてきた。何でも、臭いがする、と言うのだ。そして、玄関を開けた。私たちは居間にいたのだが、それでも臭った。異様な臭いが。強い強い草の臭い。濃い、草の根のような、通常では嗅がないような臭い。草が私達の身の近くにある自然が、何かを訴えているような、叫んでいるような感じだった。この、通常ではない臭いを嗅ぐだけで、何ともいえない恐怖が押しよせてくるようだ。これだけで怖い。母が言った。よく言うよね。強い草の臭いがしてきたら危険だって聞いたことある。と言った。何でも土石流とか、土砂崩れとかなどの危険性があるらしい。どうする？避難する？危ないかね？避難した方が。：逃げよう。避難しよう。：まさか本当に避難するとは、

学校カバンに入れた。服装は、寝巻きのズボンだと歩きにくそうだったから、ジーパンにはき替え、ズボンは、学校カバンにつめこんだ。そして、学校カバンを背負って、その上にリュックサックを背負った。すごい大荷物だと思ふ。玄関から出る前に丈夫な傘を何本か持つて出た。外に出てみると、草の根のような臭いをもっと強くなってきた。

車を出す。一つ目の坂、道が狭くて、片側は、竹がたくさん生える斜面である。カーブにかかる手前の斜面、土が竹がごっそりとなくなっていた、そうだ。行きは、私の座っている位置からだと思えなかった。暗かったのもある。そのまま降りていく。集合所の前まで行くと、何故か電気が着いていた。そのまま降りて、下り坂の先には橋がある。そこを通って外に出る。下り坂を降りていくと、目を疑った、現実だった。——絶望。こう表すのがこの時の心境を言えていると思う。……橋が無いのだ。川の水が勢いを増して、激流となり流れていく。これまで道だったところも、茶色い水で侵食され、川とな

思っていなかった。まさか自分が。だが、決まったことはしようがない。私だって、この臭いは怖い。みんな、いそいそと準備を始めた。父は車の準備。母は、服やタオルを大きなカバンに入れていた。(ちなみに、この大きなカバンは父のである。父が、このカバンを使えと言った。)姉は、貴重品(大きい物)を車に入れて、自分がいるものをまとめていた。そして、私だが、まず、リュックサックに避難生活でいりそうなものをつめこんだ。汗をふく用に小さめタオル数枚、タオル数枚、上着2着、マッチ(このあいだ、いろんなところをガサゴソしてたら出てきた。中にはたくさんマッチが入ってる)、その他もろもろ。それから、エコキユーブラジオを思い出して、それもつめこんだ。次に、学校指定カバン(学校カバン)の中身を全部出して、その中に天然水2ℓのペットボトルを2本、500mlの水入りペットボトル1本を入れ、これもあつた方がいいかな、と手さげがついているビニール袋(けっこう大きい)を数枚。持ち手がないビニール袋(前に述べたものより2倍程大きい)も数枚、

っている。橋もないし、この川の上をわたろうとしたらすぐに車ごと流され、死ぬだろう。川の水がただただ増えて、海みたいになった、とは、訳が違ふのだ。いつもは、小さなおだやかな川で、雨が降っても少ししか量が変わらない小さい頃は、よく遊んでいた川が、見る影もなく、激流として流れているのだ。きわめつきには、人の背と同じ高さくらいの大きな岩が、橋よりも手前、こちら側に一つ、転がっているのだ。——逃げられない。本当は、もう一つ道があるのだが、同じ川の上にかかる橋の上を通らなければならないし、結局は、今、目の前にあるもう川となつてしまっている道を通らなければならない。つまり、この地域は孤立した。数日程前、母が

「もし、清山の川が氾濫したらさあ。」

「道が2つとも橋しかないけん、橋が通れんかったら逃げれんくなるよね。」

「孤立するね。」

「うーん。陸の孤島？になるね。」

「まあ、もしもの話だけだね。なくはないよね。」
「ならんとは思うけど、考えられる話ではあるしねえ。」

——まさか、本当になつてしまふとは思つていなかった。前に、話していたこと。しかも、数日前に、だ。あれは何だ？ 予知か？ 予知なのか？ とにかく、奇跡だ、と思った。悪い方で、だが。とりあえず、避難できないので、家に帰ることにした。少しバックして、方向転換をして戻る。その時に、母が集会所の方をのぞいてみた。鍵は開いているみたいだった。どうする？ ちよつと充電していく？ いや、家に帰ろう。そうして、来た道に戻る。あの、ごっそりけずれている道まで戻った。今度は、私が座っている所からでも見えるので、しつかりと見たが、本当にごっそりと消えている。竹のおかげで、あまり遠くまで視えなかったのだが、全部無くなっているので、視界が開けている。まあ夜なので、真つ暗な闇だが。

こうして、家に戻つて来た。あいかわらず雨はザーザー降つてるし、草の臭も強い。家に入ってから、少し話し

る地域）は辺ぴなところだ。救援物資が届くなんて、いつになるのだろう。本当に、先が見えない。一寸先は闇とは良く言つたものだ。物理的にも未来のことも、闇に葬むられたかのようにだった。その日の夜は、眠れそうになかつたので、無駄に明るい曲をききながら寝た。久しぶりに、楽しい夢が見れた。いつもの、学校関係の地味にリアルな、休んだ心地のしない夢は見なかつた。

朝、姉と父が話す声で目が覚めた。昨日、夜九時十時過ぎあたりに寝て、起きたのは朝五時だ。いつもは、こんなに早く起きないが、精神的に不安定だったのか、すぐに目が覚めてしまった。その日は肌寒かつた。私も姉も、上着を着ていた。集会所では、電気が通っているの

をした。おそらく、あの草の臭いは、竹のところが落ちたからか、土石流が流れているからか、おそらくどちらもだろう。……まさか、自分がこうなるなんて。避難しよう、という考えが出たときから明らかに異常事態だったのだが、避難するということは避難生活が始まる、ということ。ちゃんと私も、私が気をしっかりしないとして、気を張つてた。でも、気を張る必要も無くなった。さんざん強がつて、強がつて、自分自身、心の中でも思わなかつたこと。…怖い。怖い、このまま、死んでしまふのだろうか。死ななかつたとして、これから、どうなるのだろうか。幸い、今日、父が大量にカップめんを持つて帰つていたし、火は、ガスコンロでガスも数本あるから、まだ、大丈夫。最悪、食料が無くなつても、姉が仕事関係で持つて帰つた、ダンボールいっぱいのお菓子類があるから、これを食べればいだろう。問題は水だ。今、持つている手持ちの水は2ℓの天然水入りペットボトル2本くらいだ。主に。家族4人で、これは厳しい。それにここ、清山、清松園団地（私たちが住んでい

スファルトつて、こんなにも簡単にこわれるものなんだと思つた。それから、昨日、川となりはていた道の写真も見せてもらった。水の量は割と減つたが、道が、道路が、はずれていた。無くなつていた。かろうじて、アスファルトの、道路があつた、根本？ だけ残つていたが本当にそれだけだ。まるで紙のようだな。と思つた。水の力つてすごい。川に近かつたお宅（橋の手前）は、一階に、土砂や岩、石、木々などが入つていて、壁には大穴が開いていた。一階の中が見えるくらいには。その日の内に、わき水が出るお宅（ここではYさん宅としておく）が、わき水、ご自由にどうぞと、本当に好意でしてくださつたので、ありがたく水をくんだ。本当にありがたい。きつと、これがなければ、私たちは今ごろ死んでいるだろう。Yさん宅と、私の家は、けつこうはなれていて、Yさん宅へ水をくみに行こうとしても、竹の方の道は無くなつているので、階段を使わなければならない。この階段が辛くて、下りは良いのだが、上りが辛い。なんせ、段数もそれなりにあるし、角度もそれなりにある。

しかも、集会所に行くにも、ここを通らないといけない。そして、水は4人分いる。何度も往復しないとならない。帰りは重たい水をもって。…あと、父が話していたのが、昨日、竹のところの道、ごっそりなくなっているところ、を通過して帰るとき、ヒヤヒヤしたんだそう。なんでも、通っているときに道が落ちたらどうしようか。と思っていたらしい。だから、そこをさっさと通りすぎたのだそう。つまり、私たちがもう少し遅くあそこを通過していたら、集会所で充電をしていたら、道が落ちて真逆さまに落ちて死ぬか、あの道がなくなったら車で家に戻れないので、家に帰れずにとりのこされるか。いずれにしろ、九死に一生を得たのだと言っていたし、私もそう思った。一步まちがえば死へと向かっていた。恐ろしいものだ。

こうして私たちの災害生活が始まった。

初日はよかったが、二日目三日目と、どんどん暑くなってくる上にむし暑くて、さらには、停電、断水である。暑いから。といってせん風機はつけられない。みんなう

ちわ片手である。私は初日には外へ出なかったが、二日目、三日目からは、水をくみに行っていた。基本的に、二人一組である。大きくて、水がたくさん入る容器は、リュックに入れていった。避難時に使ったリュックとはまた別のリュックである。幸い、電気は一週間、10日？まあ、これくらいでついたと思う。もう少し、たつていたかもしれないが。これでやっと、クーラーがつけられる！冷蔵庫が使える！テレビが見れる！と、みんな喜んだ。テレビに関しては、父がすることがないため、これで、ひまをもてあますことがなくなるね。ということで、喜んだ。母や姉はスマホがあるし、私は本があつたので、ひまつぶしは出来ていた。だが、電気が通っていても、電波は、まだだったようで、テレビと固定電話はまだ、使えなかった。それから、取材に来ている人もいておどろいた。カメラを持っている人とか、新聞の記者の人とか。私にも、取材の人がききにきた。ある日、私と父とで、もう一つのわき水が出るお宅（Hさん宅）で水をつがせてもらっていたときのことだった。ちなみに、何故

こちらで水くみをしているのかというと、こちらの方が私の家からちかいのだ。そして、さらに言うと、Yさん宅はわき水を、階段の上にいる人たちのために、上までホースを引っぱってくれて、階段を使わなくてもいいようにしてくれた。私たちも前まではこちを使わせてもらっていた。Yさんすごい。と思った。話を戻す。記者の人が来たのだ。私と父のところに。ちょうど水くみをしていると中で、はなしかけてきた。男の人で、災害生活とか、災害が起こってからの普段の生活とか、学校のこととか、ここの、小中学生の人数とかをきいてきた。そして、私の友達の、最近でこそ、あまり話さなくなつたが、それでも、ここの団地で一番仲良くしてた子だ。その子の家は裏が川でこの家よりも、こわれていて、一階なんてはばなかった。そんな家の一番下の子、娘さんで私よりも二つ下だった子。その子の事をまずは姓の名で、次にフルネームで。私が友達だったと知ると、父の方に、少し声を落として、

「お子さんの方には、まだ？」

と聞き、それに対して父が、
「ええ。娘の方もまだ、心の整理がいるでしょうから。」と、答えていた。そして、記者の人が、その子のことを、下の名前で、ちゃん付けしてから聞いてきた。どんな子だったか、何をしていたか、クラブ活動とかは、どうして、どのように、どんなものをしていたか。とかを。それから、私達は水をくみ終わったので、帰ろうと、立ち上がると、あっ水お持ちしましょうか？と聞いてきたので、持ってもらった。一番大きいのを持ってくれた。片腕で持っていてすごかった。私は片腕じゃあぜったい持てない。いつも両腕でもつか、リュックに入れるか、リュックに大量に水を入れて運んでいるからといって、姉や父に持ってもらうかしている。歩いている時は、父に、清山と清松園がわかれていることなどをきいていた。家の前まで付くと、私の友達の子の写真とか、持っていない。ときかれて、ケータイを探してみた。母にもそのことについて話した。そしたら、勝手に使われるから、勝手に見せちゃダメよ。と言われ、私も、その子の友達

であるだけで、家族ではないので、個人情報勝手に広めたらだめだな。と思ったので、写真を見せるのはやめた。実際には何十枚もあったのだが、パカパカケータイだし、画像悪いし、個人情報も……。となったので、協力したのは山々だが、やっぱり無かった。どうそをついた。まあこれは、私が写真を探す前に思っていたことなので、本音といえば本音だ。さらに本音を言うなら、罪悪感でいっぱいだった。最後に、お名前をと言って、父が名字だけ名乗って、別れた。そして、私は思った。記者の人と話している間、できるかぎり、考えないようにしたこと。：おかしい。まずは、記者の人は私の友達の下の名前を知っていたこと。たしかに、あそこまで家がこわれていては、誰の家かは調べたいだろうし、名字くらいは調べるだろう。だが、下の名前まで調べるか？普通。それに、私たちの名前を聞いたとき、父は名字しか答えなかった。他の人も、たいがいそうだろう。そして、記者の人は下の名前の方はきかなかった。次に、記者の人が父に、娘さんには？ときいているところだ。明らかに

に怪しい。私がきいてなかったら、良かったかもしれないが、ばっちりときいてしまっているの、逆効果なのでは？と思う。そして最後に、私が前々から、彼女の家のつぶれている。と知った時から考えていたこと、考えてしまっていたこと。彼女たち一家は本当に逃げていたのか？私はあの子の性格と親の性格をだいたいが知っている。どうしても、逃げているとは思えないのだ。それに、お母さんの帰りも、おそかったと思う。いつもいっつも、もしかしたら、と思っていたが、必死でそれをふりはらい、きつと避難していて、無事だ。と思ってきた。でも、あの記者の人といい、本当は、死んでいるんじゃないか？と、結論が出た。でも、それでも、認めたくなくて、きつと、きつと生きている。生きてくれていると信じた。願っていた。

それから、何日かたって、23日あたりには、水道が流れる。とご近所の方が言っていた。広島市水道局の、給水車で給水してくれる人も言っていた。塩素がまだ来てないのでのめませんけど、生活水としてなら、使えます

よ。と。そして水が流れた。やった！と。とりあえずこれでシャワーをあびることができると、塩素も復活すれば水をのむこともできる。本当にうれしかった。お風呂に入る分の水をくみにいなくてもいいし、塩素がまだあったら、給水車の方へ、飲料水をくみに行けばいい。とりあえず、言葉に出来ないほどうれしかった。これは、体験してみないとわからないだろう。被災者の気持ち。そして塩素は、次の日に復活した。これで、一通りは元の生活に戻ることが出来たのだ。道はある程度通れるようになった。平日は、夕方五時から朝六時半まで、日曜日は一日中。

本当は、まだまだたくさん、かききれてもいないし、もっと細かくすれば、本当にたくさんある。だが、ここに書くのはこれまでにしておこう。今では道はだいぶ整備され、いつでも通れるようになった。そして、私の友達の話は、同い年の子と2人で遊びに出かける時、2人で話していたときに聞いた。私の友達、その家族全員が死んだ。と。：私とその子が仲良くて、終いには私が泣

いてしまい、そうとう、困らせてしまった。それに、気も使ってもらった。あたたかかった。私としても、その子のことがきいておきたくて、多少、言ってもらえるように言葉は選んだが、やっぱり、亡くなっていた。正直言って、今でも信じきれていない。あたり前だろう。だってまだ、この子の口からしかきいていない。でも、そこまで大泣きせずに割と早いところで、泣きやめたのは、やはりどこかで、わかっていたからだろう。それでも、悲しいんだ。家族にはまだ知った話を話していない。私が口にするのが怖いからだ。まだ、認めたいと思えない。家族から、そんな話も出てこない、いつかちゃんと向きあえるときが来るだろうか？

平成最後の夏、忘れられない事が起きた。ここに述べた事以上に、もっとたくさんさんの事、おもしろいことがあった。それでも書ききれないから、こころ辺で、私の、日常を、終わりとする。この日常がどんなにかけがえの無いことかを知ることができる夏だった。

佳作

100キロメートルを往く

サイクリング・デイ

(ペンネーム) 山沢 智知

リュックサックに詰め込んだのは、カメラと携帯電話、薄手のジャンパーに音楽プレーヤー、財布、サングラスやモバイルバッテリー。外に出ると、霧が静かに流動的に、冷え切ったコンクリートの上を舞っていた。時刻は四時五十分。まだ日は昇っておらず、空は夜のままだ。灰色の雲をしばらく眺めた後、何となく月を探してみたが、どこにもなかった。暗闇の中、自転車は何か、希望のようなものを秘めているように見えた。鍵を差し込んで回したとき、それが僕の体にビリビリと伝わってきて、「やっぱり。今日はいい旅になるぞ」と思ったのを覚えている。

友人の待つ集合場所へ向かう。道路は思ったよりも交通量が多く、トラックや夜行バスが多く行き来していた。街灯に照らされた僕の心は、好奇心に満ち満ちていた。

集合時刻の五分前に着いたのだが、他のメンバーはみんな既に揃っていた。そこで話された最初の話題は、「雨降ってきてるけど大丈夫かな」。天気予報にない雨が、丁度僕が家を出た時あたりから降り始めたのだ。幸いそれほど強い雨でもなく、雨具なしでもサイクリングできる程度だったのだが（もちろんカッパ等の雨具も持ってきてはいるのだが、鬱陶しいから極力着たくはない）、途中で強くなれると、色々と面倒になる。やる気もそこですっかりなくなってしまうだろう。友人加岡（仮名）が「多分強くなることはないよ。天気予報が更新されてるけど、これによると朝にちよつとだけ降ってすぐに止むみたい」と言った。僕は頷いて、自転車の点検をした。異常はない、僕らを未知へと運んでくれる。時刻は、午前五時丁度。みんなもワクワク、ソワソワしていると

いうことが伝わってきた。準備は整った。僕たちは小雨の中ペダルを漕ぎ出す。

走り始めて数十分、僕はコンビニエンスストアに寄って各々朝食を買った。僕は、ツナおにぎり、たまごサンドウィッチ、コーラを買った。旅の朝はだいたいがこのセットだ。色々悩んだ末に、結局これらに落ち着く。自転車置き場で早めの朝食をとりながらこれからこのことについて軽く話した。今回のサイクリングは、スマホをハンドルに取り付けてマップアプリを使いながら進む。宮古（仮名）がそのマップ担当であり先頭、その後ろに田名辺（仮名）、僕、加岡、この順である。宮古が目的地の天気予報を調べた。快晴、気温二十八度。少し暑いくらいの、丁度いい気温だ。この旅の目的地は、三つある。まず最初に向かうのが、羽田空港。次に、お台場海浜公園。そして最後が、浅草。これらは全て、事前に四人の希望する場所を出し、話し合って決めたものだ。店を出た時、雨はすっかり止んでいた。しかし日はまだ見えない。五時四十分、コンビニエンスストアを出発し

た。僕は黙ってペダルを漕ぎ続ける。サイクリングの最中、僕はあまり喋らないようにしている。それにはいくつかの理由がある。並列で走るのは危険なので必然的に縦一列で走ることになるが、そうになると、どうしても大きな声で話さなければならなくなる。朝の静かな町を走るのに大きな声はあまりに不適切だし、何より僕らの体力を無駄に浪費していくことになってしまう。楽しい会話ほど、より自分の体力を削っていく。自転車を漕いでいるとき、周りの色々なものを見て、気が付いたことなんかは目的地についたときに話すようにしている。そうしたら、その場所がもっと楽しく感じられるのだ。割にたくさん、街にはおもしろいものが溢れている。僕は漕ぎながら街の隅々を見ていく。大きな変電所みたいな施設、不思議な雰囲気漂う雑貨店（店の外に置かれた巨大な壺やスーパーマンの等身大フィギュアなんかでわかる）、面白い名前のお店。時には、絶景スポットなんかも見つけることがある。気付くと、暗かった空は徐々に明るさを手に入れはじめ、ほんのりと明るくなっている。

た。街灯は既に全て消えている。僕は、頭の中で『Jobs』に収録された曲、小沢健二『カウボーイ疾走』をおのずと再生してしまった。

〃新しい一日がまた始まるだろう 夜明け前の弱すぎる光〃

大通りに出て、路地裏に入り、大通りに出て、路地裏に入る。くねくねと進んでいき、大きな坂、小さな坂、広い道路に架かる歩道橋をいくつも超えていく。そして出発から二時間を過ぎたあたりから、少し膝に疲れを感じ始める。手や腰、精神的な部分はまだそれほどではないのだが、この辺から膝が痛み始める。赤信号で止まった時、軽く押してやったり、伸ばしたり曲げたりしてなんとか和らげる。このまま放置して進んでいくと、痛みは急激にスピードを上げて酷くなっていくだろう。膝があげる悲鳴を、無理やり口を閉じさせて聞こえなくする。しかし、そのことを誰も口にはしない。膝が痛いなんて

言おうものなら、旅の楽しさは少しだけ損なわれてしまう。全員が、そう思っているから。心の中に留めて、黙ってペダルをこぎ続ける。やがて、僕らの努力は報われることになる。先頭で宮古が東の空を指さした。後ろの僕ら三人はその方角を見て、しばらく顔を前に戻せなくなってしまった。濃いオレンジ色に輝く眩い光の円は、ビルとビルの間で、偉大に、美しく、輝いていた。今さっき現れたばかりとは思えないくらいに、堂々と。そして朝日は、いくらかの希望を僕らに与えた。今までとは違う確かな光に照らされた街を、羽田空港を目指し黙々と進んでいく。飲み物がなくなり、僕たちはコンビニエンスストアに寄った。宮古と田名辺より先に買い物を済ませた僕と加岡は先に店を出て、サドルに座りながら目の前の道路を眺めていた。出発してすぐの頃に比べて乗用車と歩行者の数が増えていることに気付き、その話を少しした。そして、ジュースを一口飲み、ペットボトルをリュックサックにしまった。二人がビニール袋片手に店を出てくる。七時十分。再びペダルを漕ぎだした。

しばらくして、右手に川が見えた。とても大きな川だ。濁っていても綺麗とは言えないけれど、やはり川は見ていて気持ちのいいものだ。

マップアプリの示す行路は、偶然にも川に沿っていく道が続くらしく、僕は川を横目にサイクリングを続けた。川の流れと同じ方向に進んでいるおかげで、何だか少し速く進んでいる気がする。鳥たちが川岸で何かしていた。遊んでいるのか、餌を探しているのか。空の旅人は、丁寧に水中を覗いていた。狭い路地に入り、住宅街に挟まれた道に行く。リズムに乗って、ただひたすらペダルを回す。ぐんぐんと、知らない街をつき進んでいく。そしてある時、車道の上にある案内標識に『羽田空港』の文字を見つけ、いよいよ近づいてきたな、と心は高まる。遠くに大きな坂が見えた。心と体の準備を済ませ自転車ギアを変え、立ち漕ぎで一気に駆け上る。素早く脚を回す。坂を上ることだけを考えて。そして僕らの前には、海が現れた。太陽に照らされてキラキラと光る海は、とても広く、果てしなかった。さっき見たあの汚れた川は、

きちんとこの海に繋がっているのだろうか。そんなことを考えていると、飛行機の飛び音が近くから聞こえた。僕は空を見渡す。離陸したばかりの旅客機が、低い位置を斜めに飛んでいる。レンタカー屋があちこちに見える。街は、空港が近くにあることを漂わせ始めた。たくさん『羽田空港店』の間を通過して、空港へ続く道を走った。突然、視界が開けた。川に大きな橋が架かっている。そこから先はまるで巨人の手でなぎ払われたかのように広々としていて、高い建物はきれいさっぱりない。空港の建物と、離陸・着陸のための広い土地だけがそこには広がる。

「あ・・・！」

僕は思わず声を漏らす。宮古と田名辺がこちらを振り向いた。気持ちのいい、満面の笑みで。僕は後ろを向き、加岡を見る。やはり、楽しそうに笑っていた。しばらく進み、ターミナルを目指す。あともう少しだ。みんながそう思っていた。しかし、いくら進んでもターミナルには辿り着かない。宮古が道の端に自転車を止めた。僕は

も止まる。

「どうしたの？」

田名辺が訊ねた。

「建物が多すぎてどれがターミナルかわからないんだよね。マップアプリもうまく読み込めない」

宮古がスマートフォンを操作しながら言った。

「倉庫とかの建物が多くて位置情報をうまく読み込めないのかもね。どうしようか」

田名辺は辺りを見回しながら言った。周りには、たくさんの倉庫のような建物が並んでいた。観光バスの基地なんかもあった。途方に暮れていると、ふと、空が完全に明るくなっていることに気が付く。青空に、大きな雲が三つ浮かんでいた。まさかこんなに近くにきて、道に迷うとは。僕らはとりあえずやみくもに道を進む。右に行ったり、左に行ったり。しかしいくら走っても倉庫街から抜け出すことができない。話し合った結果、もう一度橋に戻りターミナルを探すことになった。来た道をもう一度辿り、街と空港の境界線の橋へ戻った。僕は、一つ

だけ横に平べったい大きな建物を見つけた。

「あれだ多分！ 一個だけ平べったいやつ」

横をモノレールが走った。それを横目に見ながら、平べったいターミナルを目指す。案内標識には、

『羽田空港、湾岸線、環七、大井ふ頭直進三〇〇メートル
川崎、蒲田（左）』

と書いてある。何台かの飛行機が並ぶ飛行場をフェンス越しに眺めながら、一本道をひた走る。いよいよターミナルに近づいてきた。ガラス張りの大きな建物だ。横断歩道を渡った先に駐輪場を見つけ、四台並べて自転車を停めた。そして僕は、まず来た方を、次にターミナルを見る。壁に書かれた『国際線』の文字に気分が高揚した。送迎のタクシーやバスがたくさん走っている。キヤリーバッグを転がす人や、大きな荷物を持つ人に混じって建物の中に入る、リュックサックを背負い手に自転車の鍵を握る僕たち。そこには、空港だけが持つ、独特

で、不思議で、気持ちの良い、冒険心をくすぐる空気が漂っていた。たぐさんの言葉で話されるアナウンス。旅

に出る・帰ってきた人達であふれる巨大なフロア。電光掲示板に表示されたフライトの案内。それら全てが、僕らの心を包んだ。二階には、たぐさんのお店が並んでいた。早く来すぎたせいでまだ開いていない店もあったが、僕らはいくつかの店を回った。日本文化のお店には、浮世絵、着物、漢字 टीシャツ、扇子などが置いてあった。何だか高そうな雰囲気を感じ出す、とても綺麗な店内が外から見えて、僕たちは中には入らなかった。今考えてみると、値段くらい確認してみるべきだったな。

展望台からの眺めは、非常に素晴らしいものだった。

青い空の下、広い飛行場に何台もの飛行機が止まっている。暖かな陽射しがテラスに注いでいる。遠くにはビル群が見える。大きな唸りをあげて、飛行機が滑走路を走り出した。徐々にスピードを上げていき、優しく、ソフトに、機体は陸から離れた。やがてタイヤはしまわれ、傾きがなくなり水平になった後、数百人の旅人を見せて

遠くへ飛び去っていった。

さて、僕らが今回羽田空港を目的地に選んだのは、決してこのまま飛行機で旅に出るからではない。では、何をするのか。答えはとってもシンプル、『何もしない』。空港に着いたら中をうろろとして、とりあえず飛行機を見る。それくらいだ。それを提案したのは僕なのだが、友人たちはみんな何故か受け入れてくれた。何も考えていないのか、何か考えての答えなのか。正直僕にも彼らの考えている事はよくわからない。とりあえず、とても感謝しているのは事実だ。何かできる場所で何もしない、それはとても贅沢で気持ちの良いことのような気がする。実際それは気持ちの良いものだった。このまま飛行機に乗ってどこか行きたいなあ、と思うことも（少なくとも僕は）なく、空港を空港として、飛行機に乗るための場所としてではなく楽しめた。

ターミナルから出て、スマートフォンで次の目的地、お台場へのルートを検索した。どうやら、レインボーブリッジを通れるらしい。自転車でレインボーブリッジを

渡れるとは。初めて知った。僕らはまたベダルを漕ぎ走り出した。来た時と同じ、飛行場に挟まれた一本道を。羽田空港からレインポーブリッジまでは、そう遠くはなかった。十五キロメートルくらいだろう。マップに案内され橋のふもとに着くと、事務所みたいな建物があつて、その横に二人の男性が立っていた。

「こんにちは。レインポーブリッジを通る際は、この台車を自転車の車輪につけて、手で押して行つて下さいね」

長方形の穴が開いた車輪付きの木の板を一人二枚渡され、もう一人の男性がペンと紙が挟んであるクリップボードを手渡した。

「ここに名前とか電話番号とかを書いて下さいね」

橋の上で何かあつた時のためだろう、名前、住所、電話番号等を書くように言われた。僕らは一人ずつ記入をし、待っている間に台車の取付けをした。ゴムバンドで前輪、後輪共にしっかりと台車に固定する。細い通路を通つて、レインポーブリッジの下を通る。数分すると、建物の前

に来了。自転車でそのまま入ってもいいようだ。ゴロゴロと台車の音をたてながら中を進んでいくと、エレベーターがあつた。これで橋の上に行くのだろう。四台同時には乗れなかつたので、僕と田名辺が先に登った。

エレベーターの一面の窓から海と船、それから、遠くにはお台場が見える。全員が橋に上がり、いよいよレインポーブリッジを渡る。車道の隣に柵で区切られた歩道があり、僕らはそこを進んでいった。二段構造の橋らしく、一番上は車道のみ、二段目に車道と歩道があるようだ。

橋の中は、鉄の柱が組まれているのが見えて、重々しさと多少の暗さがあつた。しかし、しばらく進むとちょっとした休憩スペースのような広い空間があり、外の景色を一望できるようになっていた。僕らは記念に一枚写真を撮り、また手押しで進んだ。これが意外に大変で、腕への負担がかなり大きかった。調べてみたところ、全長八〇〇メートル近くあるらしい。まだ二〇〇メートルも進んでいないだろう……。遠くに見える高層ビルたちは、お互いがお互いの視界を遮っていてどこか困惑して

いるようにも見えた。通行人もいなかったで、気を紛らわせるため何か話そうかとも思ったが、交通量も多く、話しても車の走行音にかき消されてしまったため諦めた。鉄筋の間から、海が見えた。数隻の船が白い波をたてて走っている。一時間近くかけてようやくレインポーブリッジを渡り切りお台場海浜公園に到着した僕たちは、あえて地図を見ないで公園の敷地を探索してみることにした。親子連れやランニングをする人、海水浴を楽しむ人の間を抜け、うろうろしていると、広い野原と売店を見つけた。加岡が腕時計を確認する。

「一二時ちよつと過ぎ。もうそろそろ昼飯食べてもいい時間じゃない？」

「そうだね。あの売店で何か買って、この野原で食べよう」

宮古が言い、僕は賛成した。

売店の隣に椅子とテーブルがあつたので、そこにリュックを置き、その隣に自転車を停めた。僕は売店でラムネとアイスクリームを買った。田名辺は焼きおにぎり、宮

古と加岡はフランクフルトを買った。

みんなで席につき、テーブルを囲んで食事をとる。

「どうする？ お台場には行く？」

田名辺がみんなに問いかけた。宮古が水筒の水を飲んでから、

「行かなくていいんじゃないかな。特に見たいものとかもないし。それに、絶対楽しくて長居しちゃうだろうから、そうなる浅草には行けなくなると思う」

と言った。確かに。食事を終え、お台場でもまた『何もしない』をした僕たちはレインポーブリッジに戻った。

再び台車を受け取り（顔を覚えていたらしく、今度はクリップボードは渡されなかった）、今度は行きと反対側の通路を通った。下には港があり、何台ものトラック、船、コンテナがあつた。ビル群の間に東京タワーが見える。東京タワーは押し黙って、静かな街に紛れ込んでいる。次は浅草だ。マップを雷門にセットして、レインポーブリッジを後にした。

一時間と少して、雷門の前に着いた。たくさん人の観光

客で賑わっていてもじやないけど自転車では走れないので、駐輪場を探してそこに停めた。雷門をくぐって仲見世通りを歩く。饅頭やメロンパンの香ばしい香りが辺りを漂う。昼飯を食べたばかりだけど、お腹が空いてきた。僕は団子屋できび団子を買って食べた。もちもちとした、食べていて楽しい団子だった。浅草寺で手を合わせた後、スマートフォンで近くの観光スポットを探した。

「スカイツリーがいいんじゃない？ソラマチもあるし」

「この吾妻橋っていうのがここから近いし、スカイツリーも綺麗に見えるし良いと思うけど」

宮古のスカイツリーという意見、僕の吾妻橋という意見。スカイツリーに行くと、スカイツリーに登る時間プラス、ソラマチでの時間と、かなりの時間がかかり、帰りのために予定していた時間を短くして、急いで帰らなければならなくなる。しかしそのことを言っても、宮古はどうしてもスカイツリーに行きたいらしく聞かなかった。

「どうする？二人はどっちが良い？」

買った。時間を忘れて、僕はソラマチを楽しんだ。加岡が腕時計を見た時、予定していた時間よりも三十分オーバーしていた。急いで外に出ると、日が沈みかけていて、うつすら暗くなり始めている。全員の顔が蒼白した。たった三十分、と思うかもしれないが、全員の『家に着いていなければいけない時間』に合わせてプランを立てていたので、このズレはなかなか大きな打撃になる。急いで駐輪場に戻って、自転車を出す。スカイツリーどころではない。帰り道、みんなが焦っているのが分かった。赤信号で止まった時、前で田名辺が何度も何度もスマートフォンを見て時間を確認しているのが見える。とにかく急いで、自転車を漕ぐ。少しして、やがて疲れを感じ始めた。今日一日の疲労がここに来てグツと押し寄せてきたのだ。頭が真っ白になっていて、ペース配分のことをすっかり忘れていたため、乱暴な体力の消費の仕方をしていたせいだろう。すぐに息が上がってしまい、止まるたびにうなだれるような姿勢になってしまふ。やがて日はすっかり落ちて、闇が訪れる。街灯に明かりが

宮古が田名辺と加岡に訊ねた。

「俺はスカイツリーかな。まだ登ったことないし」

「俺も登ったこと無いな、そういえば」

どうやら二人はスカイツリー派らしい。時間の都合の話もしたのだが、三人とも全く揺らがなかった。仕方がない。僕は駐輪場に自転車を取りに行き、スカイツリーに向かった。複数人で旅をする以上、我慢はつきもの。それは、最初から分かった切っていたことだ。全員が百パーセント楽しめる旅なんて存在しない。

だいたい十分くらいでスカイツリーの下に着いた。数年前に来た以来だが、記憶よりもずっと大きく、何なら少し恐怖を覚えたくらいだ。

「山沢が言ってたように時間がキツキツになっちゃうから、まず先に時間がかかるソラマチに行ってから、最後にスカイツリーに登るのはどう？」

田名辺の提案に僕は賛成して、食べ物屋や雑貨屋などたくさんのお店を回った。チュロスを食べたり、キーホルダーを買ったり、奮発してスカイツリーのプラモデルを

灯り、看板のネオンが光る。僕たちは車のヘッドライトに照らされた。静寂の川は、真っ暗で何も見えない。流れも、魚も。すっかり冷やされた空気が僕らを鋭く刺した。やっと半分来たか、というくらいの頃から、みんながイライラし始めていることに気付いた。坂の前に来た時に小さな声で文句を言ったり、信号で止まった時に貧乏揺すりをしたり、明らかに全員が嫌な気持ちになりだしている。しかし、僕にはどうすることもできなかった。たしかに、あの時吾妻橋に行っていればこんなことにはならなかったのかもしれない。しかし、それは今言っても何の意味もない、全く関係のないことだ。僕はそれに気付いていた。ソラマチの中で買い物をしている時、ほんの一時も時間のことを気にしなかった。それは、僕もみんなも一緒だ。責任は全員にある。そのことを全員が分かっていた。行き場のない怒りをサイクリングにぶつけていた。

ようやく家に着いたとき、時刻は午後八時半だった。僕は風呂にも入らずそのまま眠った。不眠気味の僕でも、

この日は一分もしないうちに眠れた。翌朝目が覚めて時計を確認する。午前十時過ぎだ。およそ十四時間も眠ってしまった僕は寝ぼけたままシャワーを浴び、適当な服に着替えた。宮古、田名辺、加岡にメッセージを送る。

『昨日はお疲れ様。ちゃんと家まで着いた?』

しばらく待ってみたが『既読』の表示はされなかった。心配に思いながらサイクリングで撮影した写真や映像の確認をしていると、二時間後くらいに全員から返信がきた。

『おつかれ。無事です』

『おつかれさま。家まで着いた』

『無事帰りました』

『おつかれ。無事帰りました』

短いその一文を読んで僕はホッと胸をなでおろして、ま

たデータの整理に戻った。

結果的に予定していた時間には間に合わず、帰らなければいけない時間を一時間以上もオーバーしてしまったのだけど、それについてはその後も特に誰も、深くは何も言っていない。話されるのは、『楽しいサイクリングだった』ということだけだ。後日僕はゲームをするために集まった。すぐに、あの時の話が出る。

「スカイツリー登れなかったね」

田名辺が苦笑しながら言った。

「今度行く?」

「そうだね」

加岡の提案に僕は頷いた。

「あ、そういえば、走った距離を調べてみたんだけど、往復で一〇〇キロ超えてみたいだよ」

宮古が言って、僕は「えっ」と驚く。

「そんなに走ったのか」

僕はびっくりして呟いた。

「よく一〇〇キロも走ったもんだ」と田名辺が自分たち

に感心した。

「間に合わなかったな、時間。まあ、危ないから急ぐのやめようってことになってなかったら間に合ってたかもしれないけど。でも間に合っても怪我なんてしてたら後悔するだけだろうからね」

「間違いないね」

僕は小さく笑いあう。僕が話し始める。

「途中みんなイライラしてたよね」

「してたね。あの状況はイライラするでしょ、誰でも」
笑いながら田名辺が言った。

「旅ってやっぱり楽しいもんだね。楽しさの中に、ちょっとしたドキドキみたいなのもあったりして。こうやって振り返ってみると、また行きたくなってくる」僕が言うと、宮古は微笑んで

「じゃあ、次はどこに行く?」と言った。

そして次の目的地は、横浜に決まった。

佳作

「難民」の同級生と先生と一緒に学校に通っていた 僕が考える「難民」問題

アメリカンスクール・イン・ジャパン 三年
ドーソン デイーン 博真

ここ数年、世界中の人々の注目を特に集めている大きな問題があります。それは「難民」の問題です。毎日、新聞やテレビのニュースで見聞きしない日はないほど、日本に住む私たちにも「難民」は身近になって来ています。

一体、「難民」とは、どのような人々を指すのでしょうか。その言葉こそ身近になったとは言え、「難民」と呼ばれる人々に実際に会ったことがある人は、日本には

まだまだ少ないかもしれません。

僕も以前はその一人でした。しかし、二〇一五年八月から二〇一六年六月までの十ヶ月間、アメリカの小学校で「難民」と呼ばれるたくさんの人々と一緒に時間を過ごすことで、僕は「難民」とはどのような人々なのか、ということ、直接的に理解する機会に恵まれました。

それは、小学五年の夏休みから、日本を離れ、アメリカで小学五年の一年間を過ごした時のことでした。僕は、祖母の住む、アメリカ合衆国ジョージア州の州都アトランタにあるインターナショナル・コミュニティ・スクール(International Community School、略して以下「ICS」という小学校に、祖母の家から通うことになりました。このICSという学校は公立ですが、いわゆる普通の公立小学校ではありません。全米に数多くある「難民」コミュニティの中でも大規模なコミュニティの一つであるクラークストンという地域に隣接していたため、ここに住む住民たちが自治体に「難民」への適切な公教育の必要性を強く訴えて設立された特殊なミッションを持つチ

ャータースクールです。そのため、生徒たちの半数以上が「難民」で、その出身国は、スーダン、ボスニア、アフガニスタン、ベトナムなど三十ヶ国以上、生徒たちの母語は二十五言語と、他に類を見ないほど、多様性に富んでいます。僕が通っていた時に一番数が多かったのが、ミャンマーからの「難民」の生徒たちでした。当時、ミャンマーでは、多数派民族であるバマール族と少数派民族であるカレン族との間で内戦が起きていたためでした。また、このICSに通っていた「難民」は、生徒たちだけではなくありませんでした。僕が教わっていた先生たちの中にも、母国で教師をしていた「難民」の先生が数多くいました。僕の体育の先生は旧チェコスロヴァキア出身の「ミス・ドーン」、放課後クラブのサッカーコーチはアイボリー・コースト出身の「コーチ・ジル」といった具合でした。なお、このICSは国際バカロレア(IB)認定校でもあるため、生徒たちには質の高い公教育が提供されています。そのために、そして、ICSが持つ多様性のために、教育に関心の高い地元アメリカ人の間でも

評価の高い学校となっています。このICSで、毎日、僕は「難民」の友だちや先生たちと一緒に勉強したり、ランチを食べたり、休み時間に遊んだり、放課後クラブ活動で汗をかくたり、週末には一緒にサッカーの対外試合に出かけたり、お互いの家を行き来したり、誕生日を一緒に祝ったりしていました。つまり、「難民」の友だちや先生と一緒に、日本の小学校に通っていた時とはほぼ同じような学校生活を送っていたのです。この経験から、僕は、「難民」とは「自国での戦争、差別、そして自然災害を避けて他国に避難してきた人たち」という本に書いてあること以上に、「言葉もわからない新しい土地で勉強したり仕事をしたり人間関係を作ったりして、毎日を一生懸命に生きようとしている人たち」が「難民」と呼ばれる人たちなのだ、ということ、身を以て理解することができました。

ところで、今、世界にはどのくらいの人数の「難民」がいるのでしょうか？(国連難民高等弁務官事務所以下、UNHCR)によると、二〇一八年現在、およそ7千万人

いると言われています。そして、この大勢の「難民」たちが避難場所として目指すのは、政治的にも経済的にも安定した先進国です。これは、母国で危険な目にあって逃れて来たことを考えれば当然のことです。しかし、イギリスの新聞社「ザ・ガーディアン」によると、二〇一七年に日本にビザ申請した二万人の「難民」のうち、日本政府からビザを得られた人は、わずか二十人しかいないそうです。つまり、ビザ申請者の合計を100%とすると、日本政府が受け入れたのは、わずか0.1%ではないのです。これに比べて、他の先進国の「難民」受け入れ率は約十五%以上です。ですから、僕は、次は日本が受け入れる番だと思います。

僕は、一ヶ月ほど前に、日本に難民を受け入れることをテーマにした二つのシンポジウムを聴きに行きました。一つ目は、東京都新宿区四谷の上智大学で開かれた『多文化日本における難民認定希望者』と題されたシンポジウムで、そこではUNHCR日本代表のダーク・ヘベカー氏の話聞くことができました。彼が言っていたこ

とで特に印象に残っているのは、『「難民」という呼び方自体を変えるべきだ』ということです。僕もヘベカー氏のこの考え方に賛成です。ですので、この作文中でも「難民」とカッコをつけて記述しています。なぜなら、「難民」の「難」は「むずかしい」という意味で、それに「人」を表す「民」をつなげて一つの単語にすると、「難しい人」というネガティブなイメージを人々に与えてしまうからです。その結果、日本人は「難民」の受け入れに消極的になってしまっているのではないのでしょうか。これと似た例に、「障害者」という言葉があります。「害」という漢字が入っているために、否定的なイメージを与えるとわれ、「害」の漢字を使わずに、「障害者」または「障がい者」に変えられました。「難民」という言葉から「難」という漢字を取り除いて「なん民」とするか、別の漢字、を当てるか、あるいはまた、既に否定的な意味合いが浸透してしまっている「なんみん」という言葉の音そのものを変えることが、日本人が「難民」を受け入れやすくするために必要な第一歩ではないかと思いま

す。

僕が出席したもう一つのシンポジウムは、東京都渋谷区の国際連合大学で開かれた「UNHCR×JICAシンポジウム開催！難民受け入れ国を国際社会全体で支援するために」というものです。このシンポジウムでは、UNHCR本部代表のフィリップ・グランディ氏の話聞くことができました。彼が言っていたことの中で、僕が特に大事だと思ったことが二つあります。一つ目は、日本は資金援助は十分にしているけれども、今の「難民」の状況はそれだけでは解決できない、という内容です。

「難民」問題解決の最優先事項は「お金」ではなく、安全に暮らせる「場所」の提供なのだ、と僕は理解しました。二つ目は、「難民」問題の解決に貢献している様々な企業がある、という紹介でした。それらの企業には、ユニクロ、イケア、スターバックス、ウォールマートなどが含まれます。ユニクロは、日本全国の店舗に古着を入れる箱を置き、毎月、それらの服を東京都港区にあるUNHCR日本事務所に送っているそうです。イケアは、

「難民」保護施設のドアに鍵を設置したり、保護施設内のあらゆる場所に再生可能エネルギーである太陽光発電を使った電灯を設置しているそうです。スターバックスとウォールマートは、「難民」を積極的に採用していて、特にウォールマートは世界で最も多い七十九人の「難民」を雇用しています。ちなみに、上記のような大企業ではありませんが、僕がアメリカの小学校に通っていた時に、祖母とよく買出しに行っていたアトランタ郊外の「ファーマーズ・マーケット」で働く人たちは、ほぼ全て「難民」だったように記憶しています。このように、利益最優先の企業も「難民」問題の解決の一翼を担おうと努力しているのだということに驚きました。もう一つ、このシンポジウムの別の参加者が言っていたことですが、僕の心に響いたことがあります。それは、「難民」は受け入れ国にとって経済的負担になるのではなく、むしろ逆で、その国の経済成長に貢献するのだ、ということです。帰る場所も失うものもない「難民」は、受け入れられた新しい場所で早くより良い生活を送れるように

しようと、誰よりも勤労意欲が高く、真剣に仕事に取り組む傾向が強いのだそうです。実際に、ICSのサッカーチームで仲が良かったベトナム出身のランディーの両親は養鶏場を任されて朝から晩まで一生懸命に働いていました。また、世の中には「難民」はほとんど何も物を持っていないから貧乏だ、という典型的なイメージを持っている人が多いのではないかと思います、必ずしもそうではありません。実は、「難民」の中には、母国で医者や弁護士、大学教授や学校の先生、エンジニアなど、高度で特殊な資格や知識や技能を要する職業に就いていた人々もたくさんいて、その人々の中には、新しい国の言語・文化・習慣を身につけて、「難民」になる以前の資格や技術を活かして働いている人々もいます。僕が通っていたICSのバスケットボールチームで仲良くしていたボスニア出身のケイナンのお母さんは、母国での教師の資格と経験を活かしてアメリカでも学校で教えていました。ですから、「難民」の受け入れは経済的負担だと思ひ込むのではなく、日本の経済を発展させるよ

い機会になるのだと積極的に捉えた方がいいのではないかと僕は思います。様々な困難を乗り越えてきた、多様な背景を持つ「難民」だからこそ、新しいアイデアが生まれるということもあるのです。例えば、前述のケイナンのお姉さんは、同じくICSを卒業した「難民」ですが、将来は自分のような「難民」の子どもにも母語も使ってより適切に指導できる教師になることを目指して、今大学で一生懸命勉強しつつ、新しい国で悩む「難民」の子どもたちを勇気付けるメッセージを、自身の経験談を交えて、YouTube動画で配信しています。

最後に、「難民」について最新の情報を知るために読んだ『ようこそ、難民！』（今泉みね子著、合同出版、二〇一八年二月十五日発行）と『難民支援〜ドイツメディアが伝えたこと』（松原好次・内藤裕子共著、春風社、二〇一八年八月三十一日発行）の二冊の本から、今現在の主要な「難民」受け入れ先であるアフリカ、中東、北アメリカ、そしてEU諸国が、どれだけ「難民」を受け入

れても、この問題は解決できそうにはない状況にある、ということ学びました。このことから、「難民」問題の解決は国際的課題であるため、日本も先進国として「難民」をもっと大勢受け入れるべきだと思うようになりました。それは、世界の中で先進国と位置付けられている日本が果たさなければならぬリーダーとしての役割なのです。それでもなお、国レベルで「難民」を受け入れるというだけでは不十分で、豊かな先進国に暮らす私たち一人ひとりの個人の努力も必要です。世界中で何千何億といった数のNGOやNPOが存在しますが、私たち一人ひとりが、このNGOやNPOにお金を寄付するのはどうでしょうか？また、それよりさらに一歩進んで、私たち自らがNGOやNPOを始めることもできます。僕自身について、今、個人的にできることは何かと言うと、少額でも「難民」支援のための募金をすること、学校の長期休み中にアメリカの祖母を訪ねた際には母校ICSで「難民」の生徒たちへのボランティア活動をすること、僕自身の語学力を「難民」支援や「難民」理解普及のた

めに活かすこと、今学校で入っているクラブ『難民』についてのスタディ・グループで「難民」について学び続けること、などです。今後はもっと「難民」問題解決のためにできることを増やしていきたいです。

「難民」は、私たちと同時代に同じ地球に住んでいる、私たちと同じ人間なのです。私たち日本と日本人は、国レベルでは日本は豊かな先進国として、個人レベルでは先進国の豊かさを享受している人間として、今よりもっと積極的に「難民」問題解決のための責務を果たすことで、国際社会の期待に応えていかなければならない立場にいます。僕は思います。

選考委員特別賞
那須正幹賞

晴れ 時々 かえる

〜えりとぴよんきちの物語〜

宮城県仙台二華中学校 三年

井崎 英里

これは、昔より桜ヶ丘という土地に住むカエルと、ご縁があり、カエルの住む土地に引越して来たえりととの間に繰り広げられた、実際にあったお話の数々です。まとめてみたら、えりの成長記録となりました。

まだ文字も知らない小さなえりが、文章を書けるまでに成長する姿をお楽しみください。

プロローグ

『かえる(蛙)』…カエル目(無尾類)の両生類の総称。変態し、幼生はオタマジャクシ。体は短く、胴と頭が直

そこには、目の前の道路が拡張される前、だれかのお家が建っていたのかな。そんな面影が残る空き地でした。これからこの場所に、えりと家族(パパ、ママ、一ツ年上の姉あやの)の住むお家が建てられます。

この日は、氷川神社の神主さんが、この土地の神様にご挨拶をしてくださるために、遙々大宮から来ていました。

神主さんは、昔話に登場する一寸法師のような出で立ちで、建築関係のおじさん達と細い竹を地面に突き刺し、土地の真ん中に四角い空間を作りました。それから、その竹に藁のような紐を結び、その紐には白い紙が付けれ、その紙たちは時々、春の優しい風を受け、鯉のぼり

が揺れるように動いています。
お酒、お水、お塩、お米などが並べられ、白い紙がたくさんついた棒を振り回しながら、神主さんは、土地の神様に向かい祝詞を上げ始めました。誰かに向かって何かをお話しているようにも見えます。神主さんの見つめる先を、目を細めたり、目を大きくしたりしながら見て

接つながり、尾はない。後肢は大きく、指に水かきをもち、跳躍や泳ぎに適する。古来、人間生活に近い存在で、田や雨の神とする地域もある。(『広辞苑第五版』より。一部省略)

やっぱり何かが違う気がします。右の靴を姉の物と間違えて履いてしまったような、洋服のボタンを一つ掛け違えたような、そんな違和感がこのカエルの説明にはあるのです。

『かえる(びよんきち)』…桜ヶ丘三丁目五の六に住む主。幼生の姿は不明。カエルの姿をしているものの、両手両足を用い這って移動。えり宅のすぐそばに住居を構えているというが、その場所は未だに確認できない。私の家族に幸運を運んでくれる存在。(『えりのこころの辞書』より)

大きな国道のすぐ隣に、歩道より一段低い小さな土地がありました。タンポポの黄色い花が風に揺れ、ツクシの坊やがこちらから顔を出しています。そんな暖かな春のある日、えりは初めてここにやって来ました。

みましたが、えりには何も見えません。大人はみな、下を向き神主さんのお話を聞いています。そんな大人達の足元を、障害物を避けるかのように、ゾロゾロ、ゾロゾロアリ達が、列をなして歩いていきます。

二礼二拍手一礼

「たくさんお友達ができますように。」

これが「地鎮祭」という祭儀であることをえりが知ったのは、ずっと先のことで、この日の思い出といえ、たくさんツクシを採ったこと。この時はまだ、このツクシがスギナとして、後に家族の悩みの種となることなど誰も知りませんでした。

そして、その「地鎮祭」を庭の隅から覗いていた小さな生き物の存在にも、まだ誰も気づいてはいなかったのです。

・ 出逢い

毎日幼稚園に通う車の中から、この場所を見てはいましたが、危ないからという大人の理由で、えりはなかなかこの場所に入れてもらえませんでした。

一雨ごとに国道沿いの木々の緑が増し、葉っぱの上の雫がキラキラと輝くある日、えりの空き地に、ブルドーザーとショベルカーが入れられていました。打合せがあったのでしょうか。車好きのえりに、働く車を見せたいと思ったのでしょうか。両親が珍しく空き地にえりとおやのを連れて来てくれました。

車から降りると、土の匂いと雨の匂いがし、空き地のあちらこちらに穴が掘られ、小さな水溜まりがいくつかわ作られていました。何かいかなと覗いていたら、一番大きな水溜まりの中に、石に隠れるように大きなカエルがいました。

「パパ。カエルさんがいるよ。」

「ママ。大きいカエル。」

作業服を着たおじさん達と話をしている両親に向かい、えりとあやのが叫ぶと、どこから拾ってきたのか、二本の棒を持って母がやって来ました。そして父が上手にカエルを棒の先に乗せて、空き地の外に逃がしたのです。

「これからしばらく工事があるから、気をつけてね。」
そんな母の声が聞こえているのか、聞こえていないのか、大きなカエルは、草むらの中にゆっくりと歩いて行き、姿を消しました。

もしこの時、母がカエルを怖がり、そのまま見過ごすような態度をとっていたら、えりとこのカエルの関係は違っていたことでしょう。

「バイバイ。」

「またね。」

ノソノソと歩くカエルに向かい、えりとあやのは、その姿が見えなくなるまで、手を振り続けました。

これが、えりとカエルの初めての出逢いです。この時からずっと、カエルはえりの成長を見守っています。

「かえさ」(えり初めての文字)

そして秋には新しいお家が完成し、えりの家族はこの土地に引越して来ました。

・初めての作文

チューリップ、紫陽花、秋桜、一位、南天、ブルーベ

省略

「名まえは、びょんきち。」

というパパのひとことで、名まえがきまり、わたしもすぐに気に入りました。

「となりのびょんきち」小学一年生六歳時作品より

○一一年刊「作文みやぎ第五十九号」入選作品

えりが初めて書いた作文は、このカエルの話です。ここで名前が「びょんきち」と決まり、ここからえりとびょんきちの物語が始まりました。

・日記

えりの小学校では毎週末「週末日記」という課題が出されます。日記を始めたばかりの頃には、この日記の話題提供のために、家族は様々なイベントを企画するものなのですが、一つ歳上の姉がいるえりの家では、そんなことはしてくれません。

それでもえりは、普通の生活の中から、面白いことを見つけて出すことが上手でした。見つけ出さなければ、宿題ができないのですから……。

そんな小学一年生のえりが書いた日記の一つに、ぴんきちの話があります。

「きょうからながそで。」

と、ママがながそでのようふくをよういしてくれた日、あーちゃんとおにわでかくれんぼをしていると、

「あつ。ぴんきちだ。」

と、かくれていたあーちゃんのこえが、きこえてきました。

「あーちゃん、見つけ。」

と、はしっていくと、おうちのうらの小さなあなに、ぴんきちがおっこちていました。

手をのばして、たすけてあげようとおもったのに、わたしの手は、ぴんきちまでとどきません。

「ママ。ぴんきちがあなにおちてるよ。」

と、おうちの中にいたママをよんできました。

あなは、わたしの足より小さいのに、ママの手でも、ぴんきちまでとどきませんでした。

はじめに、えだまめのしちゅう二本でぴんきちをは

さもうとしました。でも、ぴんきちは、またあなの中におっこちてしまいました。

「あーあ。」

つて、みんながっかり。

げんかんのほうき、にわをそうじする竹ぼうき、しちゆうをつかい、ぴんきちをほうきのぼうにのせて、やつとあなから、出してあげることができました。

「よかったね。」

と、みんな大よろこび。

またぴんきちがおちてしまうと大へんなので、あなをレンガでふさぎました。

しばらくして、ぴんきちはとなりのおうちにかえっていききました。

「ぴんきち、またね。」

とみんなで、手をふりました。

さむくなるまえにおうちにかえれてよかったね。

こんどは、ぴんきちにいつあえるかな。(「週末日記」より 小学校一年生九月、六歳時作品)

日記の最後には、当時担任をしていた、早坂千春先生からコメントをいただいています。

「ひさしぶりのぴんきちでしたね。たすけてあげて、ぴんちゃんも大よろこびだとおもいますよ。」

この頃の作文には、平仮名が左右反対に書かれていたり、濁音や半濁音の場所が、反対に付けられていたりします。左利きだったからでしょうか、えりの書く文字はよく、鏡文字となるのです。平仮名ばかりが並ぶ文ですが、まだ小さなえりが、自分の思いや考えを必死に文字にしようと頑張っている様子がよく分かります。毎回綺麗な文字で届く、担任の先生からの素敵なコメントを、えりはとても楽しみにしていました。

早坂千春先生とは、あやのの一年生の担任でもありました。私達姉妹の作文と、今書いている文字は、千春先生が教えてくださったものが基本となっています。そして、今でも毎年、千春先生から年賀状が届きます。千春先生の美しい文字を新年から拝見することで、今年も頑張ろう。何か面白いことを書くと思うえりなのです。

・絵本

もうすぐ小学一年生も終わりを迎えた三月十一日、えりの住む地方を大きな地震が襲いました。それはあまりにも大きな出来事で、えりのその当時の記憶は、ほとんど残っていません。空白の時間となっています。

これまでの生活を取り戻すまでに、一年程時間を必要としたようで、えりがぴんきちの次の作品を手掛けたのは、小学三年生になってからになります。人間だけではなく、えりの庭に住む多くの生き物にも、震災は大きな影響を与えました。あの日から、彼らの姿を見る回数が極端に減ってしまったのです。

そして震災の後えりは、一人で何かをすることがとても怖くなりました。トイレ、お風呂、寝る時も、常に誰かが一緒にいないと不安になるのです。そのため、いつもあやのと一緒に行動をしました。そして、その当時手掛けたものが絵本です。えりが文を担当し、あやのが絵を担当しました。その一ページにぴんきちが描かれているので紹介します。

「雨の季節には、大きなカエルのびよんきちが遊びに来ます。どこにお家があるのでしょうか？」

「ぜったいに、ひ・み・つ。」と言っていますか……。

きつと、えりのお家のすぐそばに、すてきな家があるはずですよ。いつかお茶にしたいですね。」

〔さくらがおか3丁目5-6〕より 文：えり小学三年生、絵：あやの小学四年生より 第十四回こどもたちのためのミツバチの童話と絵本のコンクール優秀賞作品〕

この作品のコメントでは、

「つくしん坊だらけだった広場に、私たちのお家が建てられて六年になります。」

ここには私たちの家族の他に、お花や雑草、小さな虫たちも生活しています。それぞれみなすてきな家を持っています、みんな同じ住所です。

昨年、大きな地震がありました、どの家もみんな大丈夫でした。

震災から一年。心配してくださった方々に、私たちが

元気で頑張っている様子と、ありがとうを伝えたくて、二人で絵本を作りました。

(以下省略)

この作品の総評に、昭和女子大学名誉教授であり児童文学者の西本鶏介先生から、嬉しいメッセージをいただきましたのでご紹介します。

「人も動物も植物も、いのちあるものすべてが支えあって生きているすばらしさを、自分の家や庭を中心に描いた心打つ絵本です。花も鳥も虫もみんないきいきと描けていて、最優秀賞に負けません。」

震災の翌年、復興事業も後押しをし、お家の前の道の先に、トンネルが開通しました。この一本のトンネルにより、市の中心部が近くなると同時に、交通量が一気に増えたのです。交通量の増加は、えりの周りで生活を共にしてきた、虫や動物の生活を脅かすこととなりました。そしてとうとう、この年を最後に、びよんきちが姿を見せなくなってしまったのです。

・新聞

絵本を作りながら、えりはびよんきちが心配でした。

だって、一昨年は五回もその姿を目撃しているのに、昨年は一度その姿を見かけたきり。一年が過ぎ、雪の降る季節、冬がやってきたのです。

このままでは、びよんきちがいなくなるかもしれない。

そんな不安な気持ちばかりが、えり、そして家族の心の中で膨らんでいきました。

「新聞をつくらうか。」

思わぬ母の一言でした。

「そうだね。そうしよう。」

丁度その時期、エコ壁新聞コンクルールの募集が行われていました。そのテーマの一つ、「陸や海、森の生き物や植物を守るために。」

様々な生き物が助け合って暮らすにはどうすればいいのだろう？えりとあやのは、びよんきちのことを考えました。

そして、思ったら即実行です。

これまでえりは、びよんきちを見かけた日をメモして

きました。もちろん、引越しをしてきた年からずっとです。このデータから、なぜびよんきちが現れなくなったのかを考え、二人で一枚の壁新聞を作りました。

「二人の思い」抜粋

昨年の夏、びよんきちを見かけたのはたった一度。二人であちこちびよんきち探しに出かけたものの、とうとうその姿を見ることはなかった。わたしたち人間が生活しやすい環境になることが、びよんきちや、他の動物の生活の場をうばってしまったのだ。人間と動物が共に生活をしていけるようこれからも考えたい。」

〔びよんきち新聞〕より えり小学三年生 あやの小学四年生作 第五回 ECO壁新聞コンクール応募作品〕

この作品の翌年から、びよんきちの姿を見かけることが、本当に難しくなりました。そしてえりの作文も、震災や戦争といった悲しい過去の出来事や、身近な生活の話、問題とされていた野良猫の話ばかりとなります。目の前にはあるはずの庭が、えりの心から少し離れた場所へと移動してしまったのです。

そして、次にえりがびょんきちの作品を手掛けたのは、とうとうびょんきちの姿を見ることができなくなった、小学六年生になってからになります。三年もの間えりは、びょんきちについて書いていません。

次では、少し成長したえりの作品をご覧ください。

・ 作文

「今年びょんきち見た？」

震災後、その姿を見せなくなったびょんきちでしたが、毎年家族の誰か一人は必ず、その姿を確認していました。ところが、二〇一五年夏、とうとうその姿を見ることはありませんでした。

びょんきちが来ない。この現実、えりにとっても家族にとっても、悲しいことでした。だってびょんきちは、我が家にとっては隣の住人？住カエルなのです。そんな思いをえりは、作文にしました。

小学六年生になったえりにとってのびょんきちとは、どのような存在なのでしょう。

作文の一部分を紹介します。

にしてほしい。今私は、心からそう願っています。
来年の夏は、私がびょんきちを訪ねて歩きます。元氣なびょんきちに会えますように。

〔夏の訪問者〕より 小学六年生十一歳作 第八回こども大賞作文部門奨励賞作品

えりにとってびょんきちは、かけがえのない存在となっていたようです。しかし、その翌年の夏も、びょんきちの姿をみることはできませんでした。びょんきちに逢えなくなってしまうたえりは、不調の時期を迎えます。テーマが浮かんでもアイデアが浮かばない作文。新しい学校、新しい環境への不安。日々の生活で何か不便なことがあるわけでも、嫌なことがあるわけでもないはずなのに、どこか心が錆びついているようで、辛く悲しい日々が続きました。そんなえりを見ていたのでしょうか。二年後の夏、びょんきち自らが、えりの前に現れたのです。

・ 作文

中学生となったえりは、生活に慣れることに精一杯で、以前のように庭を探索することも、なかなかできなくな

「このちよつと変わった生き物のことを、私たちよりも以前からこの土地に住む者として扱い、『びょんきち』と名付け、年に数度の訪問をとでも楽しみにしてきました。あまりにも珍しい訪問者なので、出会った日には何か良いことが起こるかもしれないと思い、心待ちにしていたくらいです。ところが今年の夏、とうとうその姿を見かけることができませんでした。

省略

秋が過ぎ、仙台は間もなく冬です。庭のすみに集まった茶色の落ち葉がびょんきちに見え、とても心配になります。びょんきちは、ちゃんと冬眠を始めたのでしょうか。

先日、仙台市科学館でヒキガエルの生態調査の結果を見つけました。その調査によると、ヒキガエルが生息している場所は、私の住む桜ヶ丘だけではありませんでした。ほっとしたもの、確実にその数は減少しています。いつかなくなってしまうかもしれない……そんな心配がないといえません。

ヒキガエルが生活できるような自然をいつまでも大切

りました。それでも、自然科学部に入部をしたことから、時々山や川に出かけ、定期考査の時期から、季節を感じていました。テストで季節を感じる？なんてさびしい生活なのでしょう。そんな生活を一年程続けたある夏の夜、何とびょんきちがえりの元を訪ねて来ました。びょんきちとの再会で、えりの生活は大きく変化をします。その気持ち、えりは夏休みの作文に書きました。中学生となったえりは、どのような文を書くようになったのでしょうか。タイトルは「雨上がり」。少し大人らしくなった気がしませんか。内容はカエルですが……。

「このところ私は不調だった。計画を立て、自分なりに先を考えて行動していても、急にやらねばならぬことが勃発し、体調を崩し、さらには、いつものような妙案がうかんではこない。

省略

く何とかしようとは思うものの、その解決策を全く見つけることができなかったのである。

そんな夏休み明けの雨降る晩のこと、我が家の庭に、

久しぶりの訪問者がやって来た。何年ぶりだろうか。この思わぬ訪問者が、以前の私を思い出させ、私に再びやる気と元氣、幸運、そして力をもたらしてくれたのだ。

彼の名前は「びよんきち」。

省略

びよんきちだ。びよんきちだ。間違はなくびよんきちだ。私の心に、目に見えない何かが入り込んできた。ただ過ぎていった時間に色が戻り、不調と思っていたこと全てに意味があると思えてきたのだ。

省略

びよんきちとの再会により私は変わった。変わった瞬間、今まで気づかなかったチャンスが見えた。それも、すぐそばに。

井崎英里復活宣言。

省略

今、私の心はワクワクしている。頑張ろうという気持ちでいっぱいなのだ。こうして再びびよんきちの話を書けることが、何よりも嬉しい。

これからも私の挑戦はまだ続く。どんな時でも、びよんきちの存在を意識しながら、常に前向きに生きて行きたい。たとえまた、不調な時期がやってきたとしても。

明日も良い日になりますように。

びよんきち、ありがとう。」

〔「雨上がり」より 中学二年生夏の作品 東北電力第四十三回中学生作文コンクール応募〕

この夏から、びよんきちはまた、えりの庭にやって来るようになりました。えりもまた、びよんきちの気持ちに込めるかのように、様々な作文に挑戦をします。

それから、その後に書いた作文が、第六十七回全国小・中学校作文コンクール、第三十回全日本水の作文コンクールです。この二つの作品は、とても名誉ある賞をいただきました。

びよんきち、おかえりなさい。

そして、ありがとう。

・エピソード

今年の夏も、びよんきちはえり家族の元に現れています。それも、家族旅行から帰宅した夜と、神戸へ出かけたあやのが、台風の影響で帰りの飛行機が運休となり、新幹線を利用し、長時間かけて仙台まで戻った夜に。

「びよんきち、ただいま。」

えり達が声をかけても、びよんきちは知らんぷり。帰宅を見届けた後はまた、どこかへと姿を隠してしまします。

でも、一つだけ変わったことがあります。

雨上がりの夜、玄関の電気を点灯していると、どこからかびよんきちがやって来るのです。その姿は、

「何か私に頼み事かい？」

そんなことを言っているようにも見えます。

神社へ行くと時々、無事カエルという願いを込めた、カエルの姿をしたお守りを見かけます。びよんきちもまた、えり家族を見守る生きた神様なのかもしれません。

中高一貫校に通うえりは、一足先に高校の部活動に参加する事が出来ます。そこで選んだのは、「生物部」。今

度は作文ではなく、びよんきちの生態を追ったレポートが見られるかもしれません。だってびよんきちは、様々なヒントを残してくれたのですから。

あとがき

私達は、国語という授業を通して、母国語である日本語を学習してきました。たくさん作品に触れ、文法を学び、自分の言葉で自分の思いを書き、作文という形でまとめます。

「えりちゃん、どうやって作文を書けるようになったの。」

そんな質問を、友人や友人のお母様方からよく受けるのですが、書いている自分自身にも、いつから、どのようにして書けるようになったのか分からないのです。

母が残してくれている、私達姉妹の思い出の品々の中に、アルバムと同じくらい、私達の書いた作文があります。様々なタイトルで書かれている私の作品の中に、いくつかびよんきちを書いたものを見つけ、それを並べてみたら、私の成長記録が見えてきました。

作文を読み返すと、その当時のその場面が蘇ります。周りの景色の色や温度、においと共に、自分が思い考えていたことまでを鮮明に思い出しました。そしてそれは、私自身の思い出であり、一代記でもあります。

これから、高校そして大学で様々な日本語を学ぶことで、私の文章がどのように変化をするのか、今の私にはまだ分かりませんが、これからも、ぴよんきちの話は書き続けたいと思います。

そしていつの日か、ぴよんきちを主役とした物語を発表することを夢見ています。

これまで、私にご指導してくださった先生方と、私の作品の数々を大切に保管してくれている母に、感謝の気持ちを込めてこの作品を贈ります。

みなさん、ありがとうございます。

そして、これからもえりを応援してください。

ぴよんきち、これからもよろしくね。

平成三十年十一月一日（引越し記念日）

井崎英里（十四歳）

選考委員特別賞 最相葉月賞

ぴんぴんころり

安田女子中学校 三年

竹本 愛梨

祖母と曾祖母の介護が始まって約二年。

最近、私も働いている母の代わりに介護を手伝っている。

今まで母がしてきた、食料の買い出しや、生活ごみの収集などを経験していくうちに見えてくるものも、考えることも大きく変わったように感じる。

私には、一〇四歳の曾祖母と、八〇歳の祖母がいる。

私は、この二人と両親の五人で一緒に暮らしている。現代では珍しい三世帯家族である。

祖母はパーキンソン病という難病を患っている。そして曾祖母は、食事や排せつは自分でできるのだが、高齢のため、あまり動き回ることができない。そして、私の両親は毎日この二人の身の周りのお世話をしている。

具体的に何をするかというと、父は週末に祖母の一週間分の薬の仕分けをする。祖母は時間によって飲む薬が決められており、一日に九回も薬を飲む。もし、この薬の仕分けを間違えて祖母が薬を飲み忘れたりしたら、大変なことになる。過去にも、実際にそうなったことが何度もあり、この前は朝、なかなか祖母が起きてこないと思ったら、祖母は自室で尿失禁の状態になったまま、床に倒れていた。最初にそれを見つけたのは父で、その時の祖母はろれつが回らず、意識も朦朧としていたという。呼びかけても「あー」や「うー」などのうめき声ばかりで、意思の疎通ができなかったのだ。

その後、父は午前中仕事を休んで、祖母の介護をした。このように、祖母は薬を一回分でも飲み忘れると、普段よりも体の動作が緩慢になったり、思考能力が低下す

る。

曾祖母は、そんな祖母を見て「本当に情けないねえ、ゆきちゃん(ゆきちゃん、とは祖母のことだ)」と呟いた。思えば、曾祖母は昔から何かと祖母に厳しく当たることが多かった。曾祖母は昔から、本当に気が強い性格で『人に気を遣う』ということをせず、言いたいことを言い、やりたいことをやる。

だから百歳をこえてもなお、あんなに迫力があるのかもしれない。

曾祖母の周囲の人間たちは、今までずっと『あの人は人の言うこと聞かないから』とあきらめ、曾祖母の言うことに従っていた。唯一、そんな曾祖母に一喝できていた、という曾祖母の長男(私の祖父である)は数年前に胃ガンで亡くなってしまった。それからは、曾祖母は我が道を歩んで生きている。それは運命さえも干渉できない道らしい。

この前の朝、曾祖母が「胸が苦しい」と訴え、私たちは慌てて救急車を呼んだ。今日が山かもしれない、とお

医者さんに言われた曾祖母だったが、結果は何の異常も無く、翌日に退院した。

「不思議な夢を見た。歩いていると川があった。その向こう側には死んだはずの娘や息子たちが手を振っていて、自分もそちらへ渡ろうとした。しかし嫌な気配を感じ、渡るのをやめようとしたら目が覚めた」

と、曾祖母は自身が見た夢について語ってくれた。その歳で生死の瀬戸際にいた際に見た夢なら、曾祖母が見たのは『三途の川』かもしれない。もしあのまま曾祖母が川を渡っていたら、曾祖母は眠るように亡くなっていたのだろうか。嫌な気配、と自分が死にそうな気配を察知し、川渡りをやめたということは、無理やり『死』を退けた、ということではないか。そうならば、ものすごいパワーを持った人物である。

その日の夜、曾祖母は無事だった、ということについて私は祖母と話した。きっと祖母は、自分にきつく当たってきた曾祖母に対し「死ねばよかったのに」とは思っていないかっただろう。逆に、「よく生き返ってきたね、

おかえり！」とも、思わなかっただろう。

ただ、曾祖母がおらず気兼ねなく過ごせる一晩限りの夢が覚めなければいいのに、とは思っていたはずだ。祖母は、曾祖母は本当に強いこと、自分では太刀打ちできないことなど、普段感じていた嫌なことを少しだけ吐いた。しかし最後には、

「私は、おばちゃん(曾祖母のこと)の家来ですからねえ、服従しないとだめなの」

とまで言った。口元だけが笑っていた。

まあバアちゃん元気出して、と言いつつ私は部屋を立ち去った。祖母は何十年という日々を曾祖母と共に生きてきたのだ。まだまだ内に抱え込んでいるものはたくさんある。私はちよつと祖母は可哀そうかな、と思うのだが、母はそんな二人に容赦ない。私は曾祖母もすごいが、母もすごいと思う。

母は潔癖症で、汚いものが大嫌いだ。掃除に関しては、ほかの追従を許さない。そんな母が、もう我慢ならない、発狂しそうになるといつも言っているのが、二人の皮膚

のことだ。年を取って、肌が乾燥してきたら誰にでもあるのかもしれない。二人の皮膚片が家のいたるところに落ちている。これは白く、ポロポロしていてフケのようだ。本人たちは無自覚なのだろうが、毎日その皮膚片や食べカスなどを歩行器でずり伸ばしながら、家中を歩いている。

母曰く、

「なんと掃除機をかけても変わらない。多い日は、一日三回も掃除機をかける」

だから母は、いつも急に

「スリッパ貸して！ あんたも何か踏んでんじゃないの!？」

と鬼の形相で私に迫り、スリッパの裏をアルコール消毒しまくる。

こんな毎日が、続いて早二年。だが私は決して不快に思っているわけではない。むしろ十五歳にして、これは

ど密度の濃い生活を送れている。そう考えれば、何か自分の今後に活かせるような宝物が眠っているのではないか。

私の両親もいづつどうなるか分からないし、母方の祖母だってそうだ。もしかしたら介護が必要になるようなときが来るかもしれない。

そういった考えを持っている時点で、私が置かれている状況は同年代の子たちに比べると特殊かもしれない。しかし、これは未来のことを考えるには、もってこいの材料だ。



選考委員特別賞 リリー・フランキー賞

平和ということ

北九州市立志徳中学校 三年

松尾 安純

大久野島。

周囲約四キロメートルの瀬戸内海に浮かぶ小島

現在の通称は「ウサギの島」

過去の通称は「毒ガスの島」

私が初めてその島を訪れたのは六歳の時。幼かった私は生まれて初めて間近で見るウサギに興味津々だった。大久野島に来る時に持参したキャベツやニンジンと直接あげることができて、一緒に来た兄弟や親せきたちと無

邪気にはしゃぎまわっていた。また休暇村大久野島というホテルで過ごす時間や朝食、夕食のバイキングだけでなく海水浴や釣りなどといったレクリエーションも堪能して大久野島を満喫していた。初めて来たところだったのに、たった一日滞在しただけで、私も兄弟たちも大久野島のことを大好きになっていた。

私たちがこの島を訪れた回数は二・三回ではない。おそらく十回はゆうに超えているだろう。小学校の卒業祝や中学校の入学祝など、ことあるごとに来島し、大久野島での時間を楽しんできた。

小学校中学年になったころだろうか。私は大久野島でサイクリングをしていた。その時、全く人目につかない場所でひっそりと建っているトンネルがふと目に付き、自転車を止めた。トンネルをくぐりぬけようとすると私を止める弟の声を聞き流し、トンネルに入った。何を期待していたのか今となってはわからないが、トンネルを抜けた先の風景に私は啞然とした。

古い黒ずんだ建物。

草がいたるところに生えているボロボロの校舎のような建物。

ガラスは割れ落ち、窓枠も歪んでいた。

幼い私でもその場所が異様であることは感じる事ができた。同時に、ものすごい恐怖と叫びたい衝動にかられた。兄弟たちも何も言わなかった。私よりはるかに幼かったのに、泣き出しそうになってしまっていた。私はこの建物が何なのか知りたくて、ホテルに向かって自転車をものすごい速さでこいだ。今思えば、知りたい好奇心とともにそこから逃げだしたいという気持ちもあったように思う。

ホテルにいた母に聞いた。母は、

「大久野島は昔地図に載っていなかったの。」

と、第一声でそう言った。

「どうしてだと思う？」

誰も答えなかった。私は心の中で私が知りたいのはそんなことじゃないのに、と思っていた。

「昔、日本が戦争をしていたころに、この島は戦争に使

う毒ガスをつくっていたの。だからつくっていることが敵にばれないように大久野島は地図から消されたんだよ。」

衝撃だった。いつも自然に囲まれて島にきている人もみんな笑顔で、ふんわりとした穏やかなこの島で、まさか人を殺す道具をつかっていたなんて想像もできなかった。信じたくなかった。私はもつと詳しく知れたかったが、母はそれ以上何も話そうとしなかったし、楽しい旅行中だったので暗い話はしたくなかった。だから私はそれ以上深く追求しようとしなかった。

それから何年か後、私は小学校の夏休みの作文で大久野島のことについて書くことにした。そのために詳しく調べていくと、悲惨すぎる過去がどんどん明らかになっていった。

毒ガスを戦争で使うことは国際法で禁止されていたが、地理的に都合が良かったため、大久野島で毒ガスを製造することになったこと。毒ガス工場が存在は秘密にしておかなければならなかったこと。そのことから陸軍

から発行された地図には大久野島が空白地帯として扱われたこと。列車窓から大久野島が見えないようにしていたということ。大久野島が地図から消えていた間、毒ガスを大量に生産していたことは言うまでもなく、そこで働いていた従事者たちは毒ガス工場へは希望入所ではな

く国家総動員法の徴用令状（青紙）によって連れてこられた一六歳〜一七歳という未成年だったこと。毒ガス工場の従事者たちは安全性を無視した労働環境に置かれたこと。辞めたくても辞めることができなかったこと。非国民と呼ばれるのを恐れ、辞職を願った人には衛兵が出てきて責め立てて、殴ったこと。また、従事者たちは毒ガスをつくっていたことについて外部に話すことを禁じられていたこと。

そんなことを知っていくうちに、母から初めて毒ガスをつくっていたというのを聞いた時よりもっと強い衝撃を受け、恐ろしくなった。そして毒ガスを使われた人たちは確かに「被害者」だが、本当は、毒ガスを作った人も「加害者」ではなく「被害者」だった、ということ

に気付いた。しかし、「被害者」は毒ガスの被害を受けた人たちだけではなかったのだ。毒ガスをつくった人も「加害者」ではなく「被害者」の一部に含まれるのだ。とすれば、「加害者」は一体だれなのだろうか。陸軍大将。総理大臣。

それとも戦争を始めたほかの国？

どれもピンとこない。毒ガスの被害を受けた中国の人たちはそれを使った日本人を恨むだろう。であれば、国のためだと我慢して毒ガスをつくり続け、後遺症に悩まされる元従事者の人たちは何を恨めばいいのだろうか。

そんなことを考えているとき、綾瀬はるかさんの出ている「綾瀬はるか 戦争を聞く」地図から消された秘密の島」という番組を見た。実際に毒ガスをつくった人、そして実際に毒ガスの被害を受けた人の話を聞くことができた。実際に毒ガスをつくった人は藤本安馬さん、九一歳。藤本さんは当時一五歳で、大久野島へは給料をもらいながら勉強ができるといわれて行った。大久野島に

降り立ったその瞬間から強烈なおいがした。その島でのことを口外しないという契約書にサインさせられた。そして毒ガスをつくることは日本国のためだと信じていた。夏場は防毒服を脱いで作業することもあった。マスクは綿で作られていて安全対策などあつてないようなものだった。効率優先、安全対策など後回し。多くの作業員が有毒物質を吸い込みながら、それこそ命がけの作業だった。「死の露」と呼ばれるルイサイトという毒ガスをつくっていたことなどを語っていた。また、藤本さんは毒ガスの影響で慢性気管支炎と胃がんをわずらい、胃と十二指腸がないという。それでもなお、食べることにこだわり続けている。その理由は、戦争当時の状況を知る人がいなくなってきた今だからこそ、その悲惨さを後世に伝えるべきだと思っているからだとおっしゃっていた。藤本さんは「加害者」は軍国主義権力だという。藤本さんは今でも「国」を恨んでいる。

島で働いていたのは男子学生だけではなかった。女学生もいたそう。毒ガスの原料をいれたドラム缶を運ば

待ち受けていた日本軍に次々と殺されていったということからこの名前がついた。李さんは涙ながらに「妹のことは話したくなかった。日本人を死ぬほど恨みます。」と語った。

また二〇〇四年に、藤本さんは当時毒ガスの被害を受けた李さんの村を訪れ、直接被害者の方々に謝罪した。毒ガスで千人以上の人々を死に追いやったこの地で、藤本さんは自分は毒ガス製造に携わったことを告白し、謝罪したのだ。李さんもその場に出席して、「正直に話してくれてよかったです。」と答える一方「彼も戦争の被害者です。みんな被害者なんです。」と語った。

また、ルイサイトの化学式を覚えていた藤本さんに綾瀬はるかさんが、「戦後、七十年以上たっているのに化学式を覚えているのはなぜですか？」と尋ねると

「本来、勉強とは自分が生きるためにするもの。でも、

されていたという。しかし、中に何が入っているのかは知らされなかった。また、毒ガスをつくりながら死んでいつてしまった人は少なくとも三七〇〇人以上いるそうだ。

そして、実際に毒ガスの被害を受けた人、中国人の李・慶祥さん、八八歳。李さんは家族八人中四人をなくした。当時一四歳だった。李さんの村には日本軍から逃げるための地下道があった。李さんはその地下道に家族とともに逃げ込んだ。女性や子供がたくさん入っている地下道に日本軍は毒ガスを投げ入れたという。李さんは八歳の妹の手を引いて逃げていた。が、妹が「お兄ちゃん、先に行つて、もう歩けない」そう言われて李さんは妹の手を放してしまったという。「そのことを思い出すと今でも涙が出る。手を放してしまったことを今でも後悔している。」と語った。

その井戸には「血肉井」という名前が付けられている。当時、毒ガスから逃れてその井戸から出てきた人たちは

自分は生きるためにしたのではなく、中国人を殺すために毒ガスをつくった。いわゆる、犯罪者。化学式を忘れたということは犯罪に根拠を忘れる、犯罪の根拠をなかったことにするというですから、絶対に忘れてはいけない。」

と語った。私はこの言葉がとても印象に残った。私は毒ガスを作らざるを得ない状況に置かれていた藤本さんも戦争の「被害者」だと思っていた。そのせいで今もなお、肉体的にだけでなく何十年も消えない自責の念を抱えるなど精神的にも苦しみ続けている。それでも自分のことを「加害者」そして「犯罪者」だという藤本さんを私は尊敬する。自らを戦争の「被害者」だという人は何人もいるだろう。しかし、自らを戦争の「加害者」だという人はなかなかいない。この言葉を聞いて、私は人間の深さについて考えさせられるとともに自分を真正面から正しく受け止められる人間になりたいと心から思った。

現在は、青海と豊かな緑に囲まれ、七百羽以上のウサギと観光客の笑顔でにぎわっている大久野島だが、こん

なにもつらく苦しい歴史があった。大久野島に旅行に来る観光客の中でも毒ガス製造について詳しく知っている人は少ないだろう。でも、少しでも多くの人に毒ガス製造の歴史やそこに関わった人たちの苦しみを知ってもらいたい。私はこの作文を書くにあたって、大久野島について調べ直した。そして改めて思った。このようなことを二度と繰り返してはいけないこと。また、日本で罪のない人たちがたくさん傷ついてしまったように、日本人も、他国の人を傷つけてしまったことを忘れてはいけないということ。そして改めて感じた。今を生きることの尊さを。これから友人たちに大久野島をおすすめの旅行先として紹介する際には、この悲惨な過去も一緒に話したいと思う。一人でも多くの人に、何の危険にもさらされず今を生きることができる奇跡を感じてほしいから。

◆小学生の部◆

「受賞作品」

大賞

親天望気で命を救え！

座間 耀永（東京都大田区・六年）

佳作

だれかを好きになるということ

新池谷 悠（群馬県前橋市・六年）

ばくとほちようき

下館 優希（神奈川県横浜市区・一年）

選考委員特別賞

【那須正幹賞】

鹿野の自然を未来につなぐ

ジュニアドクターとしての任務

田村 綾梨（鳥取県鳥取市・六年）

【最相葉月賞】

がんばりマン

名護 翔哉（沖縄県うるま市・一年）

【リリー・ランキン賞】

ヘアドネーション、夏

白井 こはる（神奈川県相模原市・二年）

「学校団体賞」

LC A 国際小学校（神奈川県相模原市）
大阪教育大学附属天王寺小学校（大阪府大阪市）

〈五十音順〉

「最終候補作品」

我が家はうずら家族！ 石川 照葉（山口県下関市・六年）
伝統を受けつぐのは大切なこと

向こう側に見えた景色 菅野 宏太（福島県福島市・五年）
フィリピンのスラム街でー貧ごんをなくしたいー 菊川 乙音（沖縄県南城市・六年）

ちはやふる 鳥取へん 田村 悠花（北九州市・五年）
ばくの戦争資料館めぐり 田村 萌梨（鳥取県鳥取市・三年）
この家いつから建ってるの？ 林 祐輝（北九州市・六年）

根拠のない自信 平家 和志（東京都多摩市・六年）
にじ色の空と夕立 毛利 伊音（福岡県筑後市・六年）
森光 唯（神奈川県相模原市・三年）

〈氏名五十音順〉

◆中学生の部◆

「受賞作品」

大賞

日常が崩れた日 非日常が日常になった日

金本 菜々実（広島県広島市・二年）

佳作

100キロメートルを往くサイクリング・デイ

（ペンネーム）山沢 智知（非公表）

「難民」の同級生と先生と一緒に

学校に通っていた僕が考える「難民」問題

ドーソン デイーン博真（東京都三鷹市・三年）

選考委員特別賞

【那須正幹賞】

晴れ時々 かえる

くえりとびよんきちの物語

井崎 英里（宮城県仙台市・三年）

【最相葉月賞】

ぴんぴんころり

竹本 愛梨（広島県広島市・三年）

【リリー・ランキン賞】

平和ということ 松尾 安純（北九州市・三年）

「学校団体賞」

北九州市立志徳中学校（北九州市）
広島学院中学校（広島県広島市）
広島市立瀬野川東中学校（広島県広島市）
福岡教育大学附属福岡中学校（福岡県福岡市）

〈五十音順〉

「最終候補作品」

ステップアップ ステップアップ 阿波さくら（広島県広島市・三年）
蘇れ！阿蘇の塩井社ブルー 宇野由里子（福岡県福岡市・二年）
忘れられない一日 倉本皓太郎（広島県広島市・二年）
私中学生、脱・消極的の旅に出る!!

塩松瑚々美（北九州市・二年）
一人の女の子の物語 島林みどり（富山県富山市・二年）
介護はバトンタッチされていくの？

スペインに行こう 立石 蓮世（福岡県福岡市・一年）
コンビニ依存症 水本美登里（福岡県福岡市・二年）
祖父の日記 門田 将弥（福岡県福岡市・三年）
山崎 達矢（福岡県福岡市・三年）

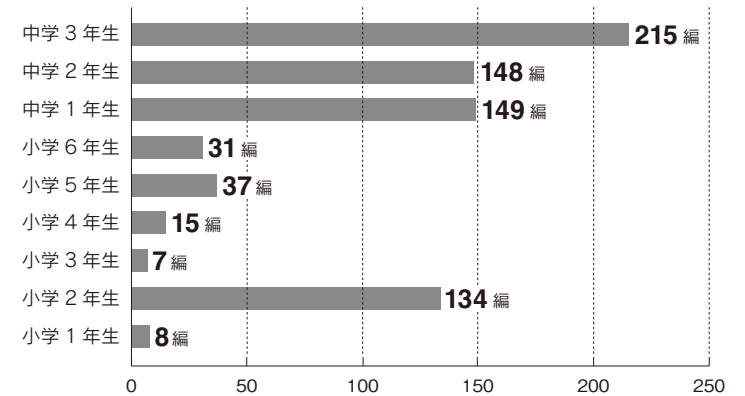
〈氏名五十音順〉

■平成30年度子どもノンフィクション文学賞応募結果

☆応募受付数 **744** 編

(小学生 **232** 編 | 中学生 **512** 編)

☆応募者学年別構成



☆応募者地域別構成

地域	応募数	九州内訳（再掲）	
北海道	0 編	福岡県（本市除く）	353 編
東北	8 編	市内	96 編
関東	79 編	佐賀県	1 編
信越	25 編	長崎県	3 編
北陸	0 編	熊本県	1 編
東海	124 編	大分県	0 編
近畿	14 編	宮崎県	0 編
中国	31 編	鹿児島県	1 編
四国	3 編	沖縄県	2 編
九州	457 編	合 計	457 編
海外	3 編		
合 計	744 編		

【事前選考委員】

相本 倫子 石橋 聡 大森 定義 幸野 英明 中野 まどか 長谷川 容子
 〈五十音順〉